



須賀川の人物史



本書は、元須賀川市文化財保護審議会委員の永山祐三さんが執筆したものを複製し、編集したものです。

筆者の「須賀川の人物史」に対する思いを歴史と文化に触れながらご一読いただければ幸いです。

広報すかがわ 掲載

須賀川市立博物館 編集

須賀川の人物史

も く じ

掲載年月	タイトル
1988.01 ①	円谷英二 ゴジラやウルトラマンの生みの親
1988.02 ②	柳沼源太郎
1988.03 ③	服部ケサ
1988.04 ④	須田善二（珙中）
1988.05 ⑤	市原多代女
1988.06 ⑥	小林久敬
1988.07 ⑦	岡部宗城 初代須賀川市長
1988.08 ⑧	坂本鉄藏 須賀川名誉市民第1号の
1988.09 ⑨	矢部保太郎 俳諧一筋に生きた
1988.10 ⑩	太田三郎 太田総合病院の創始者
1988.11 ⑪	円谷幸吉 東京オリンピックマラソン3位
1988.12 ⑫	藤井晋流 時雨塚の建立者
1989.01 ⑬	亜欧堂田善 日本銅版画の先駆者
1989.02 ⑭	太田貞喜 亜欧堂田善コレクションを蒐集
1989.03 ⑮	首藤保之助 考古資料の蒐集に奔走した
1989.04 ⑯	相楽等躬 須賀川俳諧の祖
1989.05 ⑰	伊藤佑倫 牡丹園の祖
1989.06 ⑱	可伸庵栗斎
1989.07 ⑲	渡辺光徳 銅版画家
1989.08 ⑳	広瀬嘉吉 うずもれていた洋画家

- 1989.09 ㉑石井雨考 青蔭集を編集した
- 1989.10 ㉒岩瀬御台 政略の犠牲になった姫
- 1989.11 ㉓大乘院 須賀川最後の城主
- 1989.12 ㉔須田美濃守盛秀と天仙丸 須賀川城代
- 1990.01 ㉕安藤辰三郎 須賀川ガラス創始者
- 1990.02 ㉖水野仙子 自然主義を代表する女流作家
- 1990.03 ㉗張堂大龍 入木道第四十六世を継承
- 1990.04 ㉘豊竹姫太夫 関下人形座育ての親
- 1990.05 ㉙角田磐谷 牡丹に魅せられた画家
- 1990.06 ㉚橋本傳右エ門 近代須賀川の礎を築いた
- 1990.07 ㉛白井北窓 昌平黌で勤王志士を育てた
- 1990.08 ㉜白雲 集古十種を編纂した画像
- 1990.09 ㉝道山草太郎 桔梗吟社創設者の一人
- 1990.10 ㉞市原貞右衛門綱稠 江戸末期須賀川の隆盛を図った商人
- 1990.11 ㉟山田仙吉 田善の絵馬を奉納した世話人
- 1990.12 ㊱樽川源朝 須賀川羽子板生みの親
- 1991.01 ㊲安積覚兵衛覚 「水戸黄門」格さんのモデル
- 1991.02 ㊳建弥依米命ほか 古代から中世編
- 1991.03 ㊴石川昭光ほか 近代から現在編

2020.08 編集

※ 記載内容は、約30年前のものであり、建造物や歴史的見解等現状とは異なる部分がありますのでご承知ください。



昭和六十二年九月某日、突如、乙字ヶ滝石切場に巨大な卵が出現したとマスコミによって報道された。奇しくも、この地は昭和四十一年八月、考古学に魅了された少年佐藤重寿（当時岩農校二年生）によって約二万年前の旧石器が発見されたロマンの地である。

この巨大な卵は須賀川青年会議所会員らによって、須賀川をゴジラの里にしようという発想のもとに仕掛けられたものであった。また、十月七日の鎮守秋祭りの夜行われた御輿パレード

の中に大きなゴジラ山車が引き出された。これは上北町若連の労作であった。

ゴジラは数百万年前地球上に生息していたという架空の動物である。このゴジラが昭和二十九年、突然東京湾から芝浦付近に上陸して東京を襲ったのであった。この場面を見ていた人々、特に少年たちは驚愕と歓喜の声をあげたのであった。場所は東

須賀川の人物史 ①

ゴジラやウルトラマンの生みの親

つづら
や
えい
じ
円谷英二（一九〇一—一九七〇）

宝系映画館のスクリーンであった。

ここでゴジラの生みの親の登場である。それは、世界の映画界から特撮の神様といわれた円谷英二であった。

円谷英二（本名英一）は明治三十四年七月十日、中町の桃屋大束屋の長男として生まれ、幼くして母に死別した英一は祖母に養育された。少年のころから

▲乙字ヶ滝のすぐそばに出現した話題の巨大「ゴジラの卵」



ゴジラに演出中の円谷英二特撮監督

る。前述のゴジラは五十五歳のときの作品である。その後、各種の怪獣シリーズ映画を製作したが、昭和三十年代後半、特に東京オリンピックを契機にテレ

今月号から「ふるさと再発見」の一つとして、本市が生んだあるいは本市にゆかりのある人物を取り上げ、その業績や生涯、人となりを紹介する「須賀川の人物史」をシリーズで掲載します。執筆者は、北町の永山祐三さん（五三）です。永山さんは浴場経営の傍ら、市文化財保護審議会委員として活躍、さらに須賀川市史や水道五十年史など数多くの郷土史編纂さんに携わっている郷土史研究家でもあります。

「須賀川はすぐれた自然環境に恵まれ、古くから城下町、商人の町として栄え、文人墨客の交流も頻繁に行われていました。その精神は現在も連綿と受け継がれており、



永山祐三さん

数多くの人物を生み育ててきました。本市の歴史と伝統文化を築き上げてきた先覚者のその生涯を知ること、本市の過去と現在を知ることであり、執筆に力が入ります」と、永山さんは語っております。どうぞご期待下さい。



牡丹園内にある柳沼源太郎翁像



須賀川の人物史 ②

柳沼源太郎 (一八七五—一九三七)

ぼたぼたと肥くむ朝の牡丹哉

この句の作者は柳沼牡丹園の園主であった、柳沼源太郎である。彼は俳号を破籠子(はくろうし)といい、原石鼎(せきせう)に師事。矢部椿郎(やべしんろう)、道山草太郎(みちやんそう)と共に桔槔吟社(きこうぎんしゃ)を創立した俳人であった。

に穴を堀って寒肥をやっていた」と当時を思い出して話してくれた。源太郎は、明治八年七月六日、中町の商家「糸八木屋」の長男として生まれたが、柳沼家では明治初年伊藤家の薬種用の牡丹畑を譲り受けて、観賞用の牡丹園として整備にかかっていた。彼は牡丹園を計画どおりの軌道に乗せるには専門的に農業の勉強をしなければならぬと、十五歳のときに上京。開成中学を経て東京農科大学に学んだ。帰郷後は家業の糸八木屋を弟に任せて、牡丹園に入り、牡丹と共に寝起きし、牡丹の下僕(しもべ)となつて栽培一筋に尽くしたのであった。

破 籠子
園主より身は芽牡丹の奴かな

このようにして牡丹と共に一

生を送ったのである。今なお、彼の功績としてたたえられているものは、江戸時代から伝えられて来た薬種用の牡丹畑の地割をそのまま生かしての牡丹園の整備であった。

昭和七年、柳沼牡丹園は、その功績を認められ、文部省から「名勝」の指定を受け、名称も「名勝須賀川牡丹園」となった。

その後、第二次世界大戦による戦中、戦後の混乱期を迎え、牡丹園も例外ではなく苦境に立たされたが、柳沼一族が手を取りあつて難局を切り抜け、現在の牡丹園に引き継いだのである。彼は、現在の法人化されて整備された牡丹園のあるべき姿を予期しながら、この世を去ったのではないかと思われる。昭和十四年十二月二日没、六十二歳であった。

(永山祐三)



高松宮殿下御臨席のもとに行われた顕彰碑の除幕式

須賀川の人物史 ③

服部ケサ (一八八七—一九二四)

公立岩瀬病院の正門を入った左側に女性のレリーフがはめ込まれた碑がある。この碑は、人が最も忌み嫌った病「**癩**」の患者救済事業に心血を注いだ女医、服部けさ子の顕彰碑で、昭和三十一年五月二十一日、服部けさ子女史顕彰会(会長 杉原文吾)によって建てられ、高松宮殿下

御臨席のもとに除幕式が行われた。

ケサ(俗称けさ子)は明治十七年七月十九日、東四丁目四番地(本町)の商家ランプ釜屋、服部直太郎の二女として生まれた。彼女には三人の兄姉妹があり、姉のセツが家業を継いだ。兄の・治(歌人)、妹のテイ(作家、水野仙子)は近代文学史上に、その名を残しケサと共に服部三兄妹として今日に語り継が

れている。

ケサも少女のころから文学を志したが、家族が病気になる、その苦しむ姿を見ながら看護にあたったのがきっかけとなって医学の道を選び、東京女子医学専門学校(現東京女子医大)に入学。大正三年(二十七歳)、医師試験に合格したが看護婦として三井慈善病院に就職。勤務中に癩患者に接した彼女は、ここで自分の一生を癩患者救済のた

めに捧げる決心をし、その後、癩治療について府立全生病院長、光田健輔の指導を受けて修得した。大正六年、癩患者の救済と伝導がイギリス人コンウオル・リ

女史によって行われていた群馬県草津温泉に医師として赴任し、聖バルナバ医院を開設した。当時、日本の救癩事業は外人の手にゆだねられていることを知った彼女は「日本の癩患者の救済は日本人の手で」との決意

のもとに、志を同じくする川上チヨと共に、大正十三年十月一日、日本人として最初の癩専門の鈴蘭医院を草津栗生村に開業する。しかし、患者への献身的な貢献と医院建設で心身共に疲

れ果てたケサは、開院二十三日めの大正十三年十一月二十二日午後七時三十分、心臓麻痺で四十歳という若さでこの世を去った。

彼女は医専在学中に洗礼を受

けた信仰の厚いキリスト教信者で、「人その友のために生命を捨てる、これより大なる愛はない」という彼女の言葉は清純な生涯そのものであった。

(永山祐三)



須賀川市では、昭和三十七年八月、多目的に活用できる施設として、市体育館を建設した。その舞台に設置した緞帳は「ぼたんの町須賀川」にふさわしい図柄で、古木に緋牡丹が咲き競う絢爛豪華な西陣織である。市体育館の緞帳の原画「写真」の製作者は、日本美術院同人で、



須田中画伯

須賀川の人物史

④

須田善二(珙中) 一九〇七—一九六四

東京芸術大学美術学部教授の須田珙中画伯である。彼は本名を善二といい、明治四十年一月二十一日、東一丁目三十七番地(南町)、通称三丁目の雑貨商、須田善太郎の三男として生まれた。当時の三丁目には奥州街道須賀川の南の商店街として鏡石、矢吹などの近郷近在からの買い物客で繁盛してい

た地域であった。

大正十一年、須賀川町立商業学校を卒業した彼は、画家としての志を立て、私立石川中学校四年に編入。二年間勉学に励み昭和二年、東京美術学校本科日本画科に入学した。

美術学校における彼の技量は目覚ましいもので、一年生とときに「ぶどう畑」が日本画会展に入選、受賞。二年生の昭和四年三月、第二回聖徳太子奉讃展に「旦雪」が入選したが、学則の「在学中許可なくして官展へ出品する事を許さず」の条項にふれて一週間の停学処分を受け、学内でも問題になった作品であ

る。

この出来事が生涯、画家として歩く道への出発点であったという。

昭和七年十月、第十三回帝展で「白河の夏」が初入選した。このときは前述の学則違反のことがあり、出品許可をあきらめていたが、八月に入ってから突然許可が下り、たまたま帰省途中白河城跡に立ち寄り、城壁に立って思い巡らせ感じるところがあつて画材として選び「決死の覚悟」で製作したという。在学中は松岡映丘に学び、帝展に連続入選。昭和九年卒業した。彼の作風も始めは古典的であつたが、前田青邨に師事し、昭和二十七年、日本美術院展に出品するようになってから近代的表现の可能性深求に向かう。三十七年院展出品作「吹雪」はその深求のひとつの結果であるといわれている。

院展での主な受賞は大観賞四回、院次賞四回、白寿賞五回を受賞し昭和三十五年同人に推挙された。

昭和二十六年、母校の東京芸大美術学部任教官として迎えられた。学生に教えることによつて自身の画業の進歩を図りつつ、新しい日本画の表現によつて絵画を語らせようと試みながら優れた作品を製作して将来を嘱望されていたが、昭和三十九年七月十日午前四時心筋硬塞のため「珙中芸術」の完成をみることなく五十七歳で急逝した。

残された多くの作品は、須賀川市立博物館や各地の公立美術館、コレクターなどに愛蔵されている。

また、母校の県立須賀川高等学校では彼の業績をたたえ、須田珙中賞を設定、卒業生の中から文化活動に優れた者に授与している。

(永山祐三)

須賀川の人物史

⑤

市原多代女（二七七六～一八六五）

じつとして昇る日を待つ牡丹哉
あぶなしと見るまで開く牡丹

丹かな
夕かげにくくりはじめるば
たん哉



多代女牡丹の句入り美人画（芳虎筆）

ひとひらに嬉しがる子やちる牡丹

この俳句は、江戸時代末期の女流俳人を代表する市原多代女が、牡丹の一日の生を詠んだものである。

多代女は、安永五年（一七七六）市原本家七代寿綱の四男三女の末娘として生まれた。市原家は酒造業を営むかたわら、道場町（現在の宮先町の一部と池上町）大庄屋の職にあつて町会所活動の中心となつて活躍していた。彼女が十七歳のときに分家（縮緬問屋）綱忠（多代女の兄）が若くして没し、跡継ぎがなかったため養女として入り、十九歳のとき会津若松から松崎常蔵（有綱）を迎えて二男一女をもうけた。

彼女が三十一歳のとき、夫

が病死し、その後、三人の子供（ゆう十一歳、寿綱八歳、綱雄一歳）を抱えての家業と家事による心労から神経症となった。

このことを心配した長兄の綱綱（狂歌、号・峯巒亭酒屋蔵人）は、近所の豪商で俳人の石井雨考（久右エ門）に相談して、俳諧の道に入ることを勧めた。

雨考は、仙台出身の江戸の医者で俳壇の大立物であつた鈴木道彦を紹介した。彼女は道彦に師事し、心機一転して明るい生活を送り、生涯を俳諧の道一途に懸けたのである。

文化十一年（一八一四）、雨考は「青陰集」を刊行した。その序文を多代女に依頼した。これは、俳壇における彼女の地位が確立されつつあること

を認められたからであろう。芭蕉を尊敬していた彼女は、作句のかたわら芭蕉の作品を研究して自分の立場を守り、誠実で具体的に句を詠んだといわれる。

また、芭蕉崇拜の表れとして、八十歳のとき芭蕉ゆかりの地、十念寺に田植唄の句碑を建立した。

家業・家事・俳句と一人何役をもこなした波乱にとんだ一生を送った彼女は、俳句集、俳句刷（一枚物）、俳諧の連歌、揮毫した幅、短冊などに約四千句の作品を残し、特に、「水かさに車はげしや藤の花」の句は、大正から昭和にかけての小学校唱歌に取りあげられている。慶応元年（一八六五）八月四日永眠した。九十歳であつた。（永山祐三）

須賀川の人物史

⑥

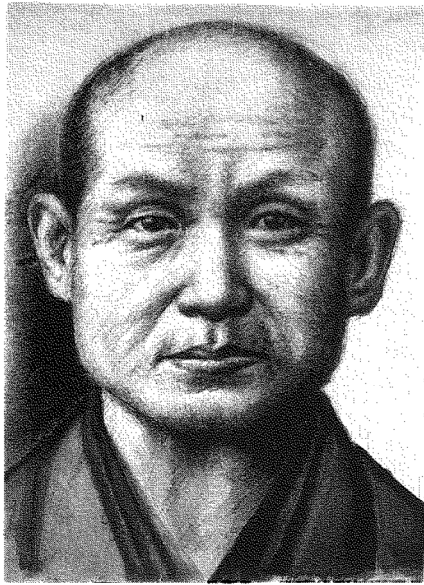
小林久敬こばやし ひさ たか
(一八二一—一八九二)

「小林久敬翁

翁は文政四年須賀川に生まれ代々問屋業をしていたが、当時郡山は水の便が悪く安積三万石の収穫しかなかったため、猪苗代湖から水を引くために全財産を投げうって寝食

を忘れ、これの成功に全力を注いだ。その後明治政府を動かして現在の安積疎水をひいて、大郡山発展の基礎をつくった先覚者である。郡山市観光協会」

これは、郡山市荒池の畔、



小林久敬翁の肖像画

愛宕神社境内に建てられている小林久敬頌徳碑の案内板の説明である。

久敬は、須賀川中町問屋で町役人を務めていた小林久長の次男として生まれた。彼は明朗活達で一途な性格であったといわれている。職業柄父親に連れられて旅をしており、六歳の時、初めて猪苗代湖を目にした。この時の印象が脳裏に焼き付き、彼の一生を湖水の水から切り離すことができなくなつたのであろう。

そのきっかけとなつたのが、天保の大飢饉であった。この時、子供のころから見ていた岩瀬、安積地方の田畑と荒野に湖水の水を引いたら農業や他の産業の発展につながるのではないかと考えたのだった。彼の思いはますますつのり、三十歳の時、三森峠に立つて

「湖水の水は必ず岩瀬、安積平野から須賀川まで引くことができる」と確信して、須賀川の豪商や有力者に協力を呼びかけたが「途方もないことを言う、気違いだ」と、いわれて見離された。だが彼は、挫けることなく各地の人々を説得して歩き、安積地方の人から賛同を得て国や県に陳情した。

ところが、時は明治となり、政府と県では、安積と岩瀬地方に入植した開拓士族の授産事業として第一回国債を発行、国の政策によって明治十二年安積疎水の開削を決定した。国では、オランダから招聘した技師、フアンドールンに工事の監督一切をゆだねて、四年間の短期間で完成させた。この間、久敬も現場に行き助言をしたが取り入れられな

かった。しかし、通水式に水門が開かれ湖水の水が安積平野に流れついた時には、彼が三十数年間私財を費して民間人としてできるだけのことをして来た念願が、形がどうであれ叶えられたのであった。彼の功績も民間功労者として、明治天皇から銀杯を賜り、新宿御苑の観菊の宴に招かれその労をねぎらわれた。

若い時から妻子と別れて生活していた久敬は、晩年病気がちとなり不自由な生活を送っていたが、福祉事業の先覚者、郡山如法寺住職の鈴木信教（一八四二—一八九二）に賓客として迎えられ、明治二十五年五月二十一日、客殿において七十一年の破乱に富んだ一生を終えた。

（永山祐三）

須賀川の人物史

⑦

昭和二十八年十二月、須賀川町長の岡部宗城は、西袋、浜田両村と須賀川町の合併は「近村にお互いにつなぐ」のあり、町民各位の隣人愛こそ最もこれを推進する大いなる力であります」と回覧板で町民に市制促進の協力を呼びかけ、昭和二十九年四月一日官民一体による「須賀川市」が誕生した。

初代市長

岡部宗城

市制施行後、初代須賀川市長に当選した宗城は、その後

須賀川市では、その功労に



対し市葬をもって報いた。

宗城は、明治十四年六月二十五日、大町で勝誓寺住職、岡部霊城の長男として生まれた。幼名を玄龍といい、後に宗城と改めた。彼は、本山の西本願寺で得度し、明治四十四年には布教使として宗門のために活躍した。昭和五年、東京教区管事、築地本願寺輪番（輪番とは会社組織での支

した。

この間、昭和十四年九月から昭和二十二年四月まで福島県議会議員として、その職にあった。昭和二十六年、帰山していた彼は、須賀川町長に当選、戦後混乱期の町政を担当して現在の須賀川市の基礎をつくったのである。

宗教家、政治家としての功績は衆知のことであるが、俳人として文化人としての足跡をみてみよう。

彼は、明治三十五年（二十一歳）帰省中に、浦和から須賀川に転居して来た作家で俳人の矢田挿雲から俳句の指導を受け、スミレ会を結成して、俳号を句童とつけた。その後、渡辺光徳、岡部卓堂（宗城弟）ら六人で、乙夜会を創立、句集を発行して普及に努めた。

明治三十九年、河東碧梧桐が東北行脚の途中、勝誓寺に一泊、句童庵で句会を催した。

等躬が三巻と軒の栗二升芙蓉咲いて下図なりけり垂碧梧桐

その後、乙夜会に矢部椿郎らも参加、郡山群峰吟社、笹鳴

吟社（久米正雄、安中俳句会）などと交流し、中央俳壇との交渉も多くなり、大正七年、原石鼎を迎えて桔槔吟社を創立した同人の一人である。このため、乙夜会も十一月に最後の句集を出して解放した。いわば今日の須賀川俳壇の礎となったのである。

また、戦争中には東京から多くの知人を須賀川に疎開させて世話をした。その中で、中央公論社長、麻田駒之助（俳号椎花）は戦後、東京に戻るときに世話になったお札にとコレクションの中から、国重要美術品認定の「釈迦如来十六羅漢図三幅対」を須賀川町に置き土産として寄贈した。この幅物は現在市立博物館に収蔵されている。

先日まで市立博物館で開催されていた「須賀川ゆかりの俳人展」に

元朝や孫が導師の正信偈が展示されていた、これは現住、玄師を詠んだ句といわれる。

（永山祐三）



名誉市民に推薦された坂本氏(50年9月15日)

須賀川の人物史 ⑧

名誉市民第1号の

坂本鉄藏 (一八九五—一九七六)

昭和五十一年春、第一回「財

団法人坂本鉄藏育英会」奨学

生に選ばれた佐伯佳貞ら六人

は、向学の念を抱き志望校に

進み、現在は各職場の中堅と

なつて活躍している。その後、

奨学生は延べ四十八人となつ

た。現在は十一人に育英会か

ら学資金の一部として、毎月

四万円を給与している。

育英会の生みの親、坂本鉄

藏は、昭和五十年八月、須賀

川市内の成績優秀な高校生で、

経済的理由から進学を断念す

る者への一助にと、須賀川市

に一億円を寄付した。市では、

表紙を各戸に配った。これら

の功績に報いるため、市では

「須賀川市名誉市民」制度を

制定し、昭和五十年九月十二

日第一号名誉市民に推薦した。

九月十五日敬老会の席上、当

時の澤田三郎市長から坂本鉄

手伝う傍ら町の活性化を図る

ため、大正九年全町から二十

歳から三十歳の青年を会員と

して募り、須賀川実業青年会

を結成、会長に就任した。二

十五歳であつた。それから三

年後、二十八歳のとき彼は、

須賀川を離れ東京都本郷にお

いて食料雑貨の店(現在のス

ーパーマーケット)を開店し

たが、昭和十年代に入り第一

次世界大戦の影響で経済界も

不況となり物価統制令がひか

れ、鉄藏も自営業からサラリ

ーマンとなった。昭和十五年

横浜市関東化学研究所に入社。

戦後、殖産住宅相互株式会社

入社、取締役として彼独自の

手腕を発揮、伊豆伊東市に大

規模な分譲別荘地を造成した。

これは、宅地分譲の先駆けと

なった事業であつた。

また、彼は信仰の念厚く、郷

里の神社や寺院に多くの寄進

をしている。特に、神炊館神

社内陣に安置されている狗犬

一対は彫刻家・柳沼曹雲(日

展作家)に制作を依頼して奉

納した。この狗犬は文化遺産

として後世に伝えられるであ

ろう。

鉄藏は、自ら手掛けた伊東

市の別荘で、昭和五十一年十

一月三十日、八十一歳の生涯

を終えた。須賀川市では、そ

の功績に対し市葬をもって報

いた。

ちなみに長男の文男さんは

東京須賀川会長に推され、郷

土発展のため、郷里と東京の

パイプ役として尽力している。

(永山祐三)

風呂を出て夕べの巷

さわやかに 榎郎

この俳句は、北町清水湯の庭にある俳人矢部榎郎の句碑である。

保太郎は、俳号を榎郎、書の雅号を邃軒と号して、青年期から、その活躍はめざましく全国の俳壇に名が知られていた。

須賀川の人物史

⑨

俳諧一筋に生きた

矢部保太郎

(一八八二—一九六四)

彼が俳句の道に入ったきっかけは、明治三十九年、教員として須賀川小学校に転任したときに、岡部句童などが中心となって結成していた乙夜会であったという。

しかし、保太郎の祖母は市原多代女の孫であるところから、当然彼にも俳句の血が流れていたであろう。

保太郎は、明治十五年四月

四日、長沼町字金町七十四番地内イ号 矢部源次郎の長男として生まれた。矢部家は代長沼藩士であったが、明治時代前期には酒造業を営んでいた。明治三十六年、福島県師範学校本科を卒業後、飯坂、白方、須賀川の各小学校教員を経て、大正六年、三十五歳で故郷の長沼小学校長となったが、大正九年四月、病気の

四日、長沼町字金町七十四番地内イ号 矢部源次郎の長男として生まれた。矢部家は代長沼藩士であったが、明治時代前期には酒造業を営んでいた。明治三十六年、福島県師範学校本科を卒業後、飯坂、白方、須賀川の各小学校教員を経て、大正六年、三十五歳で故郷の長沼小学校長となったが、大正九年四月、病気の

ため退職し、須賀川銀行に入社した。その後、自営の印刷業を開業したが、大東亜戦争による統制経済で印刷業界も統合された。昭和二十年一月一日、六十三歳で須賀川図書館長に迎えられた。

春寒や我には大きな事務机

二十二年公民館が設置され、初代館長を拝命(兼任)した。

昭和三十年五月、市図書館長を退職、以後八十三歳の生涯を閉じるまで須賀川の人々から「矢部先生、榎郎先生」と

親しまれて呼ばれていた。



在りし日の矢部保太郎氏

榎郎は、作句の傍ら、古俳句の研究に没頭した、それは、多代女の五十年忌のとき、曾孫市原又次郎(俳号旧池・衆議院議員)が

虫鳴くや昔語るもわれ一人

の追悼句を詠んだのが、榎郎

を多代女の資料蒐集にかりたてた起因であったという。

蒐集にあたっては、全国の知人友人や奈良の天理図書館まで足を運んだ。その成果が「たよ女全集」「福島県俳人事典正統」となって刊行された。

これらの功績が認められ、昭和三十三年十一月三日の文化の日に県文化功労賞が授与された。

榎郎の俳諧歴五十八年間の作句は実に六万七千八百句余、連句六十巻、主な記念碑、頌徳碑の揮毫二十五基、句碑八基がある。また、蒐集した資料は、市図書館と市立博物館に寄付された。

このように一生を俳諧一筋に生き抜いた保太郎は、昭和三十三年三月十日永眠した。八十三歳であった。

(永山祐三)

須賀川の人物史

⑩

太田総合病院の創立者

太田三郎

(一八六六—一九四九)



太田総合病院の創立者、
太田三郎氏は、八幡町出身

たちから「木綿医者」との愛称があったという。

彼の医療にかける情熱と病院の発展につなげる目は院外にも向けられ、郡山町の学校医、会社・工場の嘱託医とし

て診療にあたる一方、政界、財界にも進出し、昭和五年に福島県議会議長、七年に郡山商工会議所会頭、十年には日本医師会代議員会議長などの要職にあった。

廣告 生儀に福島病院、医科大学醫院、日本赤十字社病院等に勤務の處今般帰郷の上左の場所に醫院を開設し、普く患者の治療に従事す
安積郡郡山市中町三十八番地 郡役所前
明治二十八年 太田三郎

これは、一生を地域医療のために貢献した、太田総合病院の創立者、太田三郎の開業広告である。

三郎は、慶応二年十月二十一日、須賀川町字西五丁目五十七番地（八幡町）太田虎三の長男として生まれた。

しかし、この陰には、彼の最大の協力者佐賀夫人（大正十三年没）がいたことを忘れてはならないといわれている。
明治、大正、昭和の三代にわたり郡山地方と福島県内の

太田家の先祖は須賀川城主二階堂家に仕えたが、落城後は町役人として高年寄、大庄屋の役職にあった。明治時代、父虎三は戸長（町長）を務めた。

三郎は、明治十七年、県立福島医学校（十四年須賀川から福島に移転）に入學。二十一年に最後の医学生として卒業した。その後、福島病院、福島監獄医などを経て、二十六年に上京。医科大学国家医学講習科を修了後、佐賀夫人と結婚した。翌二十七年七月七日、日清戦争の勃発により日本赤十字社救護員として広島

予備病院勤務を命ぜられたが、二十八年五月五日、戦争が終結し、七月に帰還した。

彼は、念願の医院を長姉の嫁ぎ先、郡山町今泉久三郎（郡山町長）の持ち家（現太田総合病院本館）を借りて開院した。当時の郡山は人口一百万三十八人と県内で一番の発展地域であった。しかし、本格的な医療施設がなかったため、診療は患者の求めに応じて内科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、婦人科など幅広く行った。庶民の医師を標榜し、休診日はなく往診も断らないことを信条にしていたことから、患者

医療に貢献した三郎は昭和二十四年十二月十一日、郡山市池ノ台百十七番地の自宅で永眠した。八十三歳であった。
太田病院は、昭和二十六年財団法人太田総合病院と改組、

理事長に院長の太田辰雄（五十八年没）が就任した。現在は、太田緑子理事長（辰雄夫人で三郎の七女）が運営にあっている。

須賀川の人物史

⑪

東京オリンピック
マラソン三位

つむら や こう きち
円谷幸吉

(一九四〇—一九六八)

全国民が
くぎ付けに

昭和三十九年十月二十一日
の午後三時十五分、日本国中
の人々がテレビとラジオの前

にくぎ付けとなった。東京オ
リンピック、メインスタジア
ムの国立競技場では、皇太子
御一家をはじめ一般観衆七万
人が総立ちになり競技場ゲ
ートに目を走らせていた。

これは、東京オリンピック、
マラソン競争で一位のアベベ
選手（エチオピア）に次いで
飛び込んできたゼッケン77の
日本選手、円谷幸吉に向けら
れた目であった。その円谷の
背後にびったりとついて、ヒ
ートリ選手（イギリス）が競
技場に入り、今日に語り継が
れている二位、三位争いの劇

的なデットヒートが繰り広
げられ、観衆の興奮と大歓声
のなか、ゴール四百メートル
前、ヒートリのもすごい追い込
みに円谷の力走もついに及ば
ず三位となった。が、自己記
録を二分短縮した堂々の銅メ
ダルを胸に日本陸上選手では
唯一人、円谷幸吉がメーレン
スタジアム国旗掲揚塔に高々と
日の丸を掲げたのである。表
彰台に一位のアベベ、二位の
ヒートリと共に上がり、日本
国中の人々から惜しめない拍
手と声援をうけた。



毎年、松明あかしの翌日行われている「円谷幸吉メモリアルマラソン」



銅メダルを手に観衆の声援にこたえる円谷幸吉選手

サトウハチローが 賞賛の詩

また、マラソンに先立ち十月十四日行われた、陸上一万

円谷幸吉君」と題して賞賛の詩を贈った。その一節にと
その活躍に感激した詩人の
サトウハチローは「ありがと
円谷幸吉君」と題して賞賛
の詩を贈った。その一節にと

強豪、イワノフ（ソ連）、ク

ある。

ちなみに東京オリンピック
陸上日本選手入賞者は、男子
一万六千六百とマラソン三位の
円谷幸吉、女子八十歳障害五
位の依田郁子の二人だけであ
る。このとき円谷幸吉、二十
四歳、アベベ、三十二歳、ヒ
ートリ、三十歳であった。



東京オリンピックのメインスタジアム、国立競技場に2位で飛び込んできた円谷選手(左)。後方のヒートリとデットヒートを繰り広げるが、追い抜かれてしまう

ローマでの陸上競技では入賞者ひとりもなしの日本なのだ。たのもろ円谷!! たのもろ円谷。ボクの呼吸は円谷のストライドと同じはずみ方になる。九千二百 九千六百。さあ最後だ。ガムディーが出た。クラークが歯をくいしばる。ミルズが外側から二人をぶっこぬいた。ボクは立ち上った。円谷を見た。又見た。イワノフの赤いシャツにつづく円谷の姿。入賞だ円谷!! ありがと円谷。ボクは涙といっしょに頭を深くたれた。

素直でおとなしい少年

幸吉は、昭和十五年五月十三日、須賀川町字矢部関二十一番地（現大町）、農業、円谷幸七の六男として生まれた。幸吉は、兄五人、姉一人、両親との家族構成の中で、末っ子だったことから、みんなにかわいがられて育ち、素直

でとおとなしい少年であったという。しかし、彼には少年のころからスポーツマンとしての素養がはぐくまれていた。県立須賀川高等学校に進学して、剣道部に入部したが、二年生のとき、バレーボール部に移り活躍していた。この年の夏、マラソンランナーとしてのきっかけが訪れたのである。

次ページへつづく



表彰台に立つ左から2位のヒートリ、1位のアベベ、そして3位の円谷選手。このときの記録は、1位アベベ2時間12分11秒2で、2位ヒートリ2時間16分19秒2、3位円谷2時間16分22秒8だった



円谷幸吉記念館を訪れた円谷選手のコーチだった島野洋夫さんら当時の仲間たち

高校時代 から活躍

それは、福島県縦断駅伝のランナーが急病で出場できなくなり、そのランナーの代走を頼まれて走り、くしくも区間新記録を出した。その後、

いまだ破れず15人抜き 青・東駅伝の語り草

三十四年三月、須高を卒業した幸吉は、陸上自衛隊郡山

須高・細谷光体操教諭の指導のもとにトレイルニングに励み、三年生の秋、東北縦断駅伝（青東駅伝）福島県選手団の一人に選ばれて、めざましい活躍をし、長距離ランナーとして第一歩を踏み出したのであった。この時期、身長百六十三・五センチ、体重五十三キロであった。

駐屯部隊に入隊。三十六年の青・東駅伝では三区間走り、三区間とも新記録を出し、延べ十五人を追い抜いた。この記録は、大会始まって以来のことで今日まで破られていない。

記録を 塗り替える

三十七年四月、自衛隊体育学校開校、第一期生として入学。同時に、中央大学経済学部に入学（四十二年三月卒）、スポーツと勉学に精進した努

力家であった。体育学校では島野洋夫コーチのもとに練習を重ね、三十八年八月、ニュージーランド記録会、二万九千（五十九分五十一秒四）で世界新記録。一時間競争（二万八千百十九分）で世界新記録。三十九年六月の国民体育大会、五千円で日本新記録。八月のオリンピック候補選手記録会、一万円で世界最高記録、併せて日本新記録を出した。

本命のマラソンは四月、毎日マラソンと同時に進められたオリンピック東京大会代表選手選考会で、一位の君原選手に次いで、二位になりマラソン代表選手に決定した。この成果が冒頭の光景となって現れたのであった。

マラソンレース直後、報道陣の「今一番したいことは何か」の質問に対して、幸吉は「緊張の連続でしたから、今は、ゆっくり眠りたい」と答えたという。このとき、レース前、五十六キロあった彼の体重が、レース後五十二・五キロと、三・五キロ減っており、マラソンがいかに過酷なスポーツであるかをうかがうことができる。

しかし、彼を待っていたものは、多くの表彰式とあいさつ回り、国際試合への出場、各種団体、企業の講演会など

のハードスケジュールに見舞われ、ゆっくり休む間もなかった。

もう走れません

四十一年は、久留米市で幹部候補生教育を受け、口課にしていたマラソンの練習も思うようにいかなかった。教育修了後、体育学校に戻って練習中、右足首に激痛を覚えたが、痛みをおさえ、四十二年三月、青梅三十キロに出場した。が、惜敗、二位となった。その後、持病の腰痛に加え、

六月左足、七月に右足のアキレス腱を切断し、第三品川病院、河野稔院長執刀のもとに、アキレス腱と椎間板ヘルニアの手術を受けて、次のオリンピック、メキシコに懸けて頑張ったのであった。しかし、暮れから正月四日まで、須賀川で過ごした幸吉は「父上様、母上様、三日とろろ美味しうございました。（中略）幸吉は、もう疲れ切って走れません。何卒お許し下さい。（以下略）」と両親、兄弟、甥、姪など家族あてと、上官にあてた、二通の血染めの遺書を残し、四十三年一月八日午前一時、埼玉県朝霞市陸上自衛隊朝霞駐屯地の宿舎で頸動脈を切り、自らの命を断った。二十七歳であった。



上北町の田村さんの庭にある「時雨塚」

栗津より松風とどくしぐれ
戦 晋流
藤井晋流は、寛保元年（一七四一）、北町密蔵院観音堂境内（現上北町）に、冒頭の俳句と、松尾芭蕉、宝井其角の名を碑に刻み、芭蕉の「時雨忌」にあたる十月十二日に

時雨塚を建立して、芭蕉の五十回忌と晋流の師、其角の供養を営んだ。

この時、晋流は岩瀬山（現愛宕山）と琵琶の首（池）を中心に近江八景になぞらえた八景を選定して公園的整備を行ったのが今に伝えられている

須賀川の人物史

⑫

時雨塚の建立者

藤井晋流（一六八〇～一七六二）

須賀川八景である。

現在、この地一帯約三十鈴は、須賀川市が昭和三十四年、翠ヶ丘公園として都市計画決定を受け、自然を生かした公園として整備を進めており、約八〇％が造成されている。

晋流は、延宝八年、上州（群馬県）小泉村、近藤外記の子として生まれた。本名を佐膳、通称、太仲、源右衛門、俳号を晋流、筈月洞、百柳軒といった。少年時代の行動を明らかにする資料などはないが、彼が江戸の俳人、其角の門人

と思われる。

藤井家は、甲州武田家の家臣であつたが、主家没落後、各地に移り住んでいた。その後、永住の地として須賀川を定めて町年寄役などを務めていた。元禄十三年（一七〇〇）春、公儀御代官、岡田五右衛門から、奥州御買米御用を命じられて、大型廻船二十一艘を持ち、江戸と大阪の各所に屋敷を構える大商人に成長した。

また、元禄十年（一六九七）諏訪町千用寺に須賀川の「時雨の鐘」として設置した梵鐘にも藤井家の名を見ることができるとして、かなりの地位にいたことから察すれば、子供のころから江戸に出て問屋筋に勤めており、それが縁で須賀川の豪商、藤井総右衛門（俳号・川柳）の長女、久須（俳号・霜楠）の婿として迎えられた

流し「筈月集」四冊、「蕉門録」二冊などを脱稿したが、上梓することなく写本のみ残された。もしこれらが出版されていたなら晋流も俳諧史上に大きな足跡を残していたことであろう。

晋流は常に芭蕉の精神に傾倒しており、相楽等躬も須賀川俳諧の後継者として彼を選び、等躬所蔵の芭蕉真筆十六点、曾良、等躬の軸各一点を譲与したが、晋流没後の明和年間の火災にあい焼失したという。

晋流は、宝暦十一年（一七六一）十一月二十五日、江戸の屋敷において永眠、浅草権寺に葬られたが、遺髪を十念寺に埋葬して、藤井源右衛門夫妻の墓碑が建てられた。八十二歳であつた。

（永山祐三）

須賀川の人物史

⑬

日本銅版画の先駆者

亜欧堂田善（一七四八—一八三二）

AODOO
DENZEN
NO
ISCHIBOEMI
SOEKAGAWA
GAJOEKAI

この、アルファベットは、オランダ語での表記で「亜欧堂田善の碑、須賀川雅友会」

と読み、大正十年十二月、須賀川雅友会（会長・佐藤亀之助）が田善の菩提寺である北町、長祿寺参道に建てた記念碑であるが、現在は山門わきに移築されている。

亜欧堂田善は、江戸幕府の老中であつた白河城主・松平定信の命を受けて、わが国最初の銅版画による大画面の「新

訂万国全図」を幕府天文方と共同制作した銅版画の先駆者である。

諏訪町に
生まれる

田善は、寛延元年（一七四八）、諏訪町農機具商・永田惣四郎の次男として生まれ、名を善吉といつた。

彼は、八歳のときに、父と死別した。兄丈吉（画号崑山・狩野派）が家業を継いだが染物業に転職した。善吉も手伝いの傍ら、兄から絵の手ほどきを受け、絵の上手な子供として評判であつた。これを裏付ける資料として、数年前十歳歳のときに描いた大絵馬が上小山田の古寺山観音堂から発見された。絵馬の裏面に「絵師 須賀川 永田善吉」とある。



県重要文化財「亜欧堂田善像」遠藤田一筆

松平定信
との出会い

り、画号はないが、すでに画家として活躍していたことが分かる貴重な作品である。

その後、伊勢国（三重県）寂照寺に画僧月窓を訪ね教えを受け、画技を研鑽した田善は、本町の庄屋・安藤辰三郎の依頼で「江戸芝愛宕山図」屏風を描いた。寛政六年（一

七九四）、領内巡視のため安藤家に立寄り休憩した白河城主・松平定信が、その屏風を目にとめ、さっそく田善を引見し、その才能を惜しみ、専門画家として励むよう、同行した谷文晁に紹介した。

もし、このとき定信に見い出されなかったならば、田善は蘭学や銅版画などとかかわることなく、一介の町絵師として生涯を送ったであろう。それも、その人の運命である。



「図の塚山此發」の場「八権井白と衛兵長院隨幅」



「新訂万国全図」(日本近海)部分、106×186cm

アジアと ヨーロッパを一見

寛政八年(一七九六)、白河藩御用絵師となった彼は、屋敷を白河会津町に与えられて、名を太仲と改めた。四十九歳のときであった。

寛政十年(一七九八)、白河藩江戸屋敷に呼び出された田善は、定信からオランダ製の銅版世界地図やヨハン・エリクス・リーディングの「諸国馬画集」風景画、人物画などの銅版画を見せられて銅版画

技法の習得を命じられた。それは、亜細亜と欧羅巴を一見できる、日本版世界地図を幕府天文方と制作することであった。このときに、田善は定信から「亜欧堂」の号を賜ったという。

司馬江漢 から破門

まず田善は、技法習得のため、日本における融蝕銅版画の創製者である司馬江漢の門をたたき師弟の縁を結んだのであったが、性格が合わず破門されたといわれている(儒学者・久保木竹窓文書)。結局、田善は、松平定信とその周辺の蘭学者・森島中良、石井恒右衛門らから知識を得、ショームの百科辞書などを参考にしながら、彼なりに研究を重ねて技法を習得したといわれている。定信懸案の世界地図が完成するのは十二年後の文化七年(一八一〇)である。その十二年間、彼は、ひたすら銅版画の研究に明け暮れていたことであろう。その傍ら江戸の街をよく歩いている。それは、

田善の「目」でしか見ることができなかった江戸の街の風景と風俗を究明にスケッチしたのが銅版画や油彩画の作品として知られている「江戸シリーズ」約五十図が全国の博物館、美術館、個人に所蔵されている。江戸シリーズの銅版画のほか、オランダ製の銅版画などを田善なりに模写した銅版画約二十点がある。

文化五年(一八〇八)、日本

日本最初の世界大地図 「新訂万国全図」

文化七年、田善は、松平定信の長年の懸案であった日本最初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図」(一〇六×一八六センチメートル)を完成させ、

定信の期待にこたえたのである。これは、一七・二×五四・四センチメートルの特大銅板縦横四枚ずつ、十六枚の原版を作成し、それを合わせたものであった。

スタッフは、チーフ・リーダーが幕府天文方の高橋景保二十五歳で、間重富が五十四

最初の銅版画五十二図からなる精密な解剖「医範提綱内象銅版画」が蘭学界の第一人者で医師・宇山川玄真の依頼で完成させ、西洋医学の神髄を日本人に説いた最高の医学書として蘭学者や医学者を驚かせたのである。

これらの銅版画は「新訂万国全図」を制作するためのたたき台としてできたといっても過言ではないだろう。

文化七年、田善は、松平定信の長年の懸案であった日本最初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図」(一〇六×一八六センチメートル)を完成させ、

定信の期待にこたえたのである。これは、一七・二×五四・四センチメートルの特大銅板縦横四枚ずつ、十六枚の原版を作成し、それを合わせたものであった。

スタッフは、チーフ・リーダーが幕府天文方の高橋景保二十五歳で、間重富が五十四

翁と号して、築地浴恩園に移り隠居した。田善もこの時を機会に須賀川に帰ったといわれている。

青蔭集の 挿絵も制作

須賀川に帰ってからの田善は、石井雨考の依頼で俳書「青蔭集」の挿絵として「大隈滝芭蕉翁碑之図」を銅版画で制作している。このほか、「時雨塚碑景之図」もあるが須賀川に関する銅版画は、ほかに見ることがはない。が、田善は江戸で制作した原版をもとに、八木屋半助の店で「大日本草創重欧堂先生鐫当所名産鏤盤摺」の看板を掲げ、奥州道往來の旅人に「須賀川みやげ」として布や紙に摺り、工芸品として販売していた。

帰郷後の田善は、商家などの依頼による日本画を主として描き、文政五年(一八一二)五月七日、七十五歳の生涯を閉じるまで一介の町絵師として絵筆を手にかけていたのである。

昭和五十一年二月、須賀川市に「亜欧堂田善の銅版画」など百二十五点が、市内諏訪

町の医師太田宏一さんから贈られた。

このコレクションは、太田

さんの祖父太田貞喜翁が一生をかけて蒐集した亜欧堂田善の作品などである。

須賀川の人物史

⑭

亜欧堂田善コレクションを蒐集

おお
た
てい
き
太田貞喜

(一八七二―一九四五)

貞喜は、明治四年一月二日、安積郡三柏村守屋、農業太田

昌貞の二男として生まれた。

十六歳のとき志を立てて上京、開業医のもとで研さんを積

み、須賀川の旧家藤井家の娘テツと結婚した。

その後、明治二十六年、諏訪町に居を構え、「太田眼科医

院」の看板を掲げた。当時の

医学は、漢方と西洋医学の過

渡期にあつて、人々の公衆衛

生思想も低く、その向上のた

めに医師会の中に特別講話

を組織し普及につとめた。ま

た、長年にわたり第一小学校

の校医を勤め、学童たちから

は「太田先生」と卒業後も親

しまれていた。

ちなみに、明治二十三年か

ら三十九年までの市内の開業

医は、岩瀬郡立病院（医師四

人）、薄井信太郎、田代広治、

太田貞喜だけであつた。

ここで「太田貞喜と田善のその後」について述べてみたい。田善については、本紙一月号に掲載したが、明治期に入ると田善の研究も盛んにな

り美術研究家が須賀川を訪れるようになった。藤岡作太郎、沢村専太郎が美術誌「国萃」に、それぞれ田善の作品について発表して、全国の美術品コレクターなどから注目されるようになった。特に、南蛮美術品蒐集家として有名な神戸の池長孟などは数回にわたり須賀川に来て田善とその一門の作品を購入している。

これら作品の流出を心配した佐藤亀之助、太田貞喜、矢部椿郎、竹内憲治（現九十八歳）などが中心となつて市外への散逸を防ぎ、田善の顕彰をしようと「須賀川雅友会」を結成した。

この中で、貞喜も蒐集に情熱を燃やし質・量ともに屈指のコレクションとなつた。

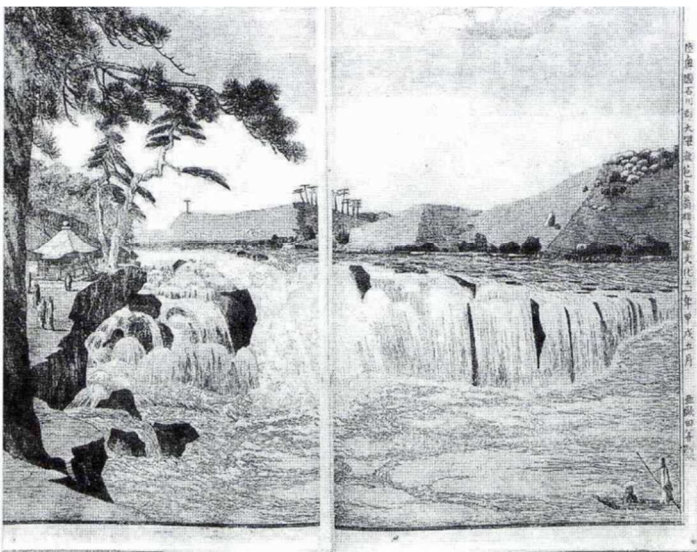
翁は、昭和二十年二月九日、田善の作品を掛けた自室で永眠したという。七十四歳であつた。

福島県では、昭和六十一年、「太田貞喜の亜欧堂田善コレクション」を重要文化財に指定。作品は市立博物館に収蔵展示されている。

(永山祐三)



太田貞喜翁



亜欧堂田善作「大隅瀧(乙字ヶ滝)芭蕉翁之図」



首藤保之助氏



首藤保之助著の「泥面の研究」

多くを須賀川市に寄贈した首藤保之助と、主なコレクションについて述べてみたい。

保之助は、明治二十年三月二十五日、岩瀬郡木之崎村字北作三十三番地（現長沼町）味戸保左衛門の三男として生まれた。二十六年三月、須賀川尋常高等小学校高等科卒業後、東京青山師範学校に学び、四十二年卒業、浅草永住町に住み、済美尋常小学校に奉職した。このころから教え子を連れて、区内や千葉県などに

大正十二年九月一日の大震災

須賀川の人物史 15

考古資料の蒐集に奔走した

首藤保之助（一八八七—一九六六）

遺物採集に出掛けたという。

特に、この時期の蒐集では、江戸時代の子供の遊び道具であった「泥面」（土で作り素焼にしたメンコ）のコレクションである。この泥面は当時、道路や下水道の工事に伴って、江戸時代の遺構が掘り返されて出てきたものを人夫や知人、生徒などの協力によって、千数百個を収蔵した。しかし、

に遭い、その数も半減したが、震災復興事業によって多くの数を加えた。昭和五年、一つの区切りとして「泥面の研究」を発刊した。現在、須賀川市立博物館には、約八百個の泥面が収蔵されている。

彼は、教員生活三十六年六か月の間、休日などは専ら遺跡を巡り、それも、関東地方を主にして、北は北海道から、

昭和二十五年一月二十六日の法隆寺金堂の火災で、国は、その年の五月、文化財保護法を制定した。この法律制定以前は、国宝保存法だけで、埋蔵文化財については、何ら保護政策もなく遺跡が農業用地、宅地、工場用地などの大規模開発によって消滅してもまったくの野放し状態であった。この時期、これらの土地から出土した遺物に私財を投じ、克明に記録。五万余点の蒐集をして、考古学上貴重な資料と認められた。晩年その資料の

南は山口県まで遺物の蒐集に奔走した。

現在、これらの遺物は市立博物館に収蔵されているが、失われた遺跡のものとしては、山形県津谷の旧石器、千葉県市川市真間、須和田の土師器などは貴重な資料となっている。特に真間出土の「朱墨二面円硯」は古代の文房具として重要美術品に認定された。

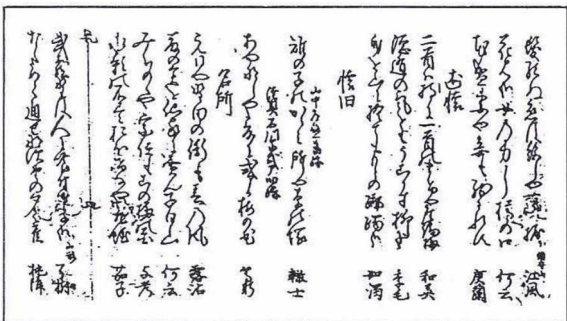
日本の歴史上に旧石器時代が存在を提起した群馬県の相沢忠洋は、昭和二十四年春、岩宿遺跡から発見したポイント（槍先）を、明治大学の芹沢長介教授のもとに持ち込んだが、保之助は、これより二年前の二十二年三月に鏡石町

成田の石切場から出土した旧石器を入手している。これは、後に学会から成田型旧石器と呼ばれるようになった。

二十年十一月、帰郷した彼は泉村（現玉川村）の屋敷内に、二棟の展示場を建て「阿武隈考古館」として一般に公開した。その後、三十二年に須賀川市へ寄贈した。その功績によって県文化功労賞を受賞。

四十三年四月二十六日、一生を蒐集にかけて八十一歳の生涯を閉じた。（永山祐三）





「伊達衣」の一部

須賀川の人物史

16

須賀川俳諧の祖

相楽等躬 (二六三七〜一七二五)

親しまれている代表句である。

芭蕉と曾良は、それから二十八日までの七日間、等躬の家に滞在して、八幡社（現市役所）、可伸庵（N T）、芹沢の滝（五月雨）、十念寺、諏訪明神（神炊館神社）、石河滝（乙字滝）ほか市内の社寺などを訪れ、参詣していることが、曾良の旅日記に記されている。

等躬は、寛永十四年（一六七七）、白河藩須賀川代官、初代 相楽貞次の五男で分家した貞栄の長男として生

奥州岩瀬郡之内須賀川
相楽伊左衛門にて

風流の初やおくの田植歌 翁
覆盆子を折て我まうけ草

等躬

水せきて昼寝の石やなをすらん

曾良

以下略

今から三百年前の元禄二年（一六八九）三月二十日、奥の細道行脚の旅に、江戸を立つた俳人松尾芭蕉は、門人河合曾良を供にして、街道筋の

名所や旧跡、歌枕をたずねながら、「道の奥」の玄関口白河の関を越えて、四月二十二日、須賀川の俳人相楽等躬（伊左衛門）の家にワラジをぬいだ。

等躬は、芭蕉に長い旅の労をねぎらい「白河の関越えはいかがでしたか」などと話しながら芭蕉、等躬、曾良とで三吟歌仙を卷いた。

発句の「風流の初やおくの田植歌 芭蕉」は、今も人々に

内藤義央（俳号 露沾）とも俳諧を通して親しい関係にあった。平との行き来に詠んだといわれている。

「あの辺は津久羽山哉炭けふり」等躬自筆の句碑が諏訪町長松院境内にある。

等躬の篇著書には、「葱摺」（元禄二年刊）「伊達衣」（元禄十二年刊）「一の木戸集」（元禄十三年刊）「蕉翁独吟五歌仙考」「蝦夷文段抄」などがある。特に「伊達衣」には、奥の細道関係が多く収録されている。

等躬の俳諧は、貞門から蕉風となり、門人も百数十人いたといわれている。

元禄七年十月十二日、芭蕉が大坂で客死したとき、その死を悼み句を詠んでいる。

「とても死ぬ身なら難波の枯野哉 等躬」

彼もまた、正徳五年（一七一五）十一月十九日、平城内高月邸において露沾公と談笑中、斃れたという。七十八歳であった。遺骸は菩提寺の長松院に葬られた。

（永山祐三）



須賀川牡丹園



222 年前に
摂津国から

今年も、須賀川観光の一枚看板である国指定文化財、名勝「須賀川の牡丹園」の季節がやってきた。

二百九十種、四千株の花王が、その妍を競い、多くの観光客を魅了させる牡丹園は、今から二百二十二年前の明和三年（一七六六）につくられた。市内の薬種商、伊藤祐倫（本名治兵衛、通称和泉屋忠兵衛）が牡丹の根を薬用にするため、苗木を摂津国山本村

須賀川の人物史

⑪

牡丹園の祖 伊藤佑倫（二七三五～一七七七）

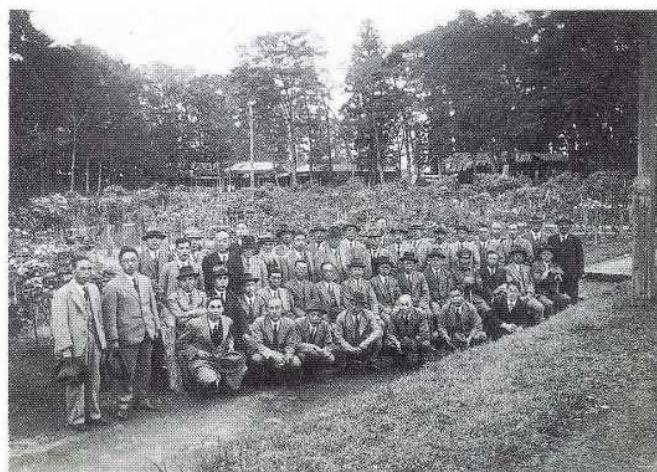
（現兵庫県宝塚市）から導入して、伊藤家の薬草園で栽培し

御薬園を管理

たのが草創と伝えられている。

祐倫は、享保二十年（一七三五）、道場町（現宮先町）山辺半左衛門の長男として生まれた。が、親戚の薬種商、伊藤八右衛門祐兼に跡継ぎがなかったため、養子となり、その家業を継いだ。

祐倫は、薬種商と医者とを兼ねて、地域住人の医療にも



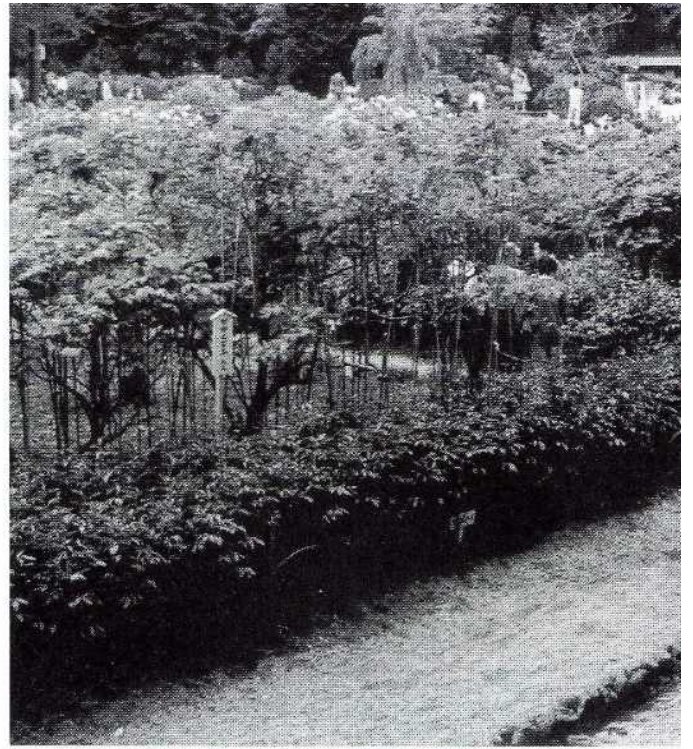
昭和初期の須賀川牡丹園

源頼朝によって鎌倉幕府が開かれてから、須賀川地方は、二階堂家の所領となった。この地域は二階堂家の一族で、和田峯ヶ城を居城として、阿武隈川沿岸を支配していた須田家の領地であった。

伊藤家は、二階堂家と同じく、鎌倉幕府から安積郡（郡山市）

の支配を任された氏族で、大槻に城を構えていた。しかし、天正十七年（一五八九）六月、磐梯山麓上原の戦いで、伊達政宗に敗れ、須田家を頼って和田に來たと伝えられている。

昭和十年、牡丹園を訪れた文豪吉川英治は、同行した佐藤直四郎（元マメタイムス記者）に、「この地は中世のころ、ここを支配していた領主の御薬園跡ではないのですか」と、園内の地形や環境をみていわれたという。このとき英



たのではないかと考えられる。

佑倫栽培の ほ場が国名勝に

天正十七年十月二十二日の須賀川城落城によって、須田家は茂木一万石（栃木県）の城主として佐竹家に迎えられた。伊藤家は和田に残り、農民となり、元禄二年（一六八九）、半内祐晴（山辺半兵衛の子）の代に須賀川に出て薬種商となり、屋号を和泉屋とした。このころから薬草の栽培も本格化して、字名も和田千本から伊藤新田となった。

薬園ではなかったか、また、その管理を伊藤家が行っていた。

治は、

「観る人を見るが牡丹の主かな」の俳句を残している。

二階堂家の御薬園説は、以前から伝えられていたが、この地域は二階堂家よりも、和田に本拠があった須田家の御



日立市の「大甕神社」前にある伊藤祐倫が建立した道標

明治の初め、この薬草園を伊藤家から譲り受けた柳沼家（昭和六十三年二月号広報すががわ参照）では、観賞用の「牡丹園」づくりにかかった。が、祐倫が薬用として栽培した牡丹のほ場をそのまま生かしての整備であった。これが国の名勝に指定された要因となった。

柳沼家では明治三十二年、牡丹園の字名を牡丹園とした。現在、牡丹園は柳沼家から須賀川市に寄付され、財団法人須賀川牡丹園保勝会が管理にあたっている。

日立に

道標を建立

文を祐倫に戻すが、彼は、屋号「和泉屋」にあやかり、茨城県日立市の「泉が森」（茨城県指定史跡）にある「泉神社」を強く崇敬していた。そしてその証として道標を、日立市大みか町六丁目にある大甕神社前の岩城街道（旧国道六号）と泉川道の追分に建てた。この道標は、参拝者や旅人の用に供された。

銘文

銘文○正面

比地ミカノ原水木村へ十二町
従是 泉川道

常陸二十八社之内天速玉姫神社

○右 明和八年辛卯四月吉日
○左 奥州岩瀬郡須賀川

泉屋忠兵衛立之

と緑色の斑点のある石材で、高さ八十八センチ、幅三十七センチ、奥行二十七・五センチの角石に刻まれている。この道標も昭和三十年代の交通機関の発達に伴う道路拡張工事によって、一時は無用の長物として近くの日立製作所厚生寮内に放置されていた。が、昭和三十六年、日立市大久保町の大窪定一、森山町の丹規矩、水木町の河村左内ら泉神社の氏子たちによって、再建された。また、周辺も整備され、「日立市指定有形文化財、泉川道標」として保護されている。

祐倫も商用で東奔西走の旅に明け暮れ、安永六年（一七七七）七月三日、会津において没し、諏訪町普応寺に葬まれた。四十二歳であった。

（永山祐三）

世の人の見付ぬ 花や軒の栗

今から三百年前の元禄二年（一六八九）、俳人松尾芭蕉と弟子の河合曾良は、奥の細道の旅の途中、須賀川の俳人相楽等躬（広報四月号参照）の家に草鞋をぬぎ、八日間滞在した。この間、等躬や市内の俳人と交遊をもった芭蕉にとって、僧可伸の印象は、

特に深く「おくのほそ道」の中に
「此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいふ僧有。（中略）」
世の人の見付ぬ花や軒の栗」と残している。

芭蕉は、二度可伸庵を訪れ、四月二十四日には同庵で句会を催した。（曾良随行日記）
一、廿四日 主ノ田植（等躬の家の田植）昼過ヨリ可伸庵ニテ会有。会席、そば切。祐碩賞之。雷雨。暮方止。

須賀川の人物史

可伸庵 栗斎（一六〇〇年代）

18



NTT須賀川支店の西側にある軒の栗、可伸庵跡



漂泊のおもいやまず、「おくのほそ道」の旅に出た松尾芭蕉と河合曾良の二人は、元禄二年四月二十二日（陽暦六月九日）須賀川宿に入り、当時の駅長相楽等躬（通称伊左衛門）宅に草鞋を脱いだ。今から約三百年前のことであつた……

この句会の出席者は、芭蕉、曾良、等躬、栗斎、等雲（吉田）須竿（内藤）素蘭（矢内）の七吟歌仙一巻の興行であつた。このときの歌仙「軒の栗」の発句を芭蕉は、「かくれかやめた、ぬ花を軒の栗」と詠んだが、後に「世の人の見付ぬ花や軒の栗」と推敲して、「おくのほそ道」の中に入れた。

奥の細道の行脚から三百年の歳月を隔てた今日、俳諧史上に語り継がれている僧可伸の氏素性についての資料などは見当たらないようである。

が、ここで、次の資料などから可伸庵栗斎について考えてみたい。①おくのほそ道 ②曾良随行日記 ③伊達衣 ④白河風土記 ⑤栗木庵記

まず、相楽等躬の家は現在の本町三十三番（NTT）にあった。「おくのほそ道」によると、可伸庵は「此宿の傍に」とある。この地は、旧本山派修験道年行事徳善院の境内地（南北十六間余、東西二十六間余、約四百二十坪）であつた。現在は、NTTの一部、本町集会所、市道一五〇二号の敷地となつている。

徳善院は須賀川落城後の慶長五年（一六〇〇）、二階堂家の一族行宋（ぎょうそう）が守屋（現岩瀬村）にあった徳善院の名跡を継ぎ建立した。

相当の素養の あつた俳人？

可伸庵は、この境内に建てられていた隠居所と考えられる。可伸について芭蕉は「世をいとふ僧」「隠栖（いんせい）も心有さまに覺て」と書いているところから、可伸は徳善院の住職を次の代に譲り、隠居の身として、静かに暮らしていたのではないかと考えられる。可伸の、等躬や市内の俳人たちとの付き合い、芭蕉と曾良に対するもてなしかたなどからみると、相当の素養のあつた俳人と思われる。これらのことから可伸は二階堂行栄の子、もしくは徳善院第二世を継いだ住職ではなかったか、しかし、このことは想定の上のことであるので、今後確かな資料が現れるのを望み筆を置く。



渡辺光徳作「はせを翁すか川に宿るところ」の図



赤堀信平作「渡辺光徳氏の顔」

須賀川の人物史 ⑬

銅版画家

渡辺光徳（一八八七—一九四五）

今年の四月、芭蕉「奥の細道」三百年を記念して、須賀川市が建てた「芭蕉記念館」に、枯淡の境地で描かれた、「はせを翁すか川に宿るところ」の図が展示されている。作者は、銅版画家で、近代創作版画運動の担い手の一人として活躍した渡辺光徳である。光徳は、本名を徳一といい、

る。突兀は大正二年春、若くして亡くなった友人であった。この突兀は、光徳が上京するときに酒を酌み交わし、記念の俳句をしたためあったという。このことから、想定すれば、彼の上京は、明治末から大正初めではなかったかと思われる。また上京のことについて、美術雑誌「木星」（大正十四年二月号）「中村彝追悼号」に、光徳は「白骨を前にして」と題して彝の死を悼んでいる。

この中で光徳は「中村君！（中略）初めて君に会ったのは君の谷中の下宿屋生活時代で、広瀬の下宿であったかと思ふ。ちやうど僕は画家の生活に入るべく郷里を出て来た時であったが、（以下略。注、彝の谷中時代は大正四年七月（五年八月）と記しており、近代洋画の鬼才、中村彝と光徳との交友を知ることができる貴重な資料である。

光徳は、上京後、小石川区（現文京区）水道端に居住した。銅版画の道に入ったのは亜欧堂田善の作品に惹かれたためであるといわれている。作品にも丸形小判「亜欧堂田善之像」と美術雑誌「みづゑ」

に四か月にわたり論文を連載している。

初期の作品は、二号、三号ぐらいのものが多く残されている。これらの作品がたたき台となつて、第八回帝展（昭和二年）に「甕焼場」を出品、帝展十一回展までの連続四回入選の作品となつて現れたのである。

しかし、彼は、制作に使用する薬品によつて呼吸器系の病と潜伏性脚気にかかれ、起きることができず、布団の中で絵を描くこともあったという。

昭和十八年太平洋戦争が激しさをまし、光徳夫妻は須賀川に疎開したが、自宅は戦火に遭い、作品など一切が焼失した。晩年は、須賀川町図書館（館長矢部保太郎）の留守番を兼ねてその一室を仮り住まいとしながら、絵筆を取っていた。が、再起することができず、昭和二十年九月八日、破乱に富んだ一生を終えた。しかし、それは、自分の選んだ道を歩いた一生でもあった。五十八歳であった。

光徳が図書館に寄付した三点の銅版画は現在、市立博物館に保管されている。

（永山祐三）

童（広報すががわ六三年七月号）の指導のもとに俳句を始め、乙夜会の結成に参加。俳号を拳風、建風、無畏懂といった。この時期、はぐくまれた俳句の心と仏の教え、特に法華経は、彼の作品に溶け入っていたのを知ることができる。青年期に入り二十歳のときから二年間、軍隊生活を送り、除隊後、画家としての志を立てたようである。しかし、彼が上京したのはいつであったのか、初期の作品として、大正二年制作の油彩画「長祿寺本堂再建関係者肖像」と「俳人突兀（高久田金一）像」があ



嘉吉が独身時代に生活していたという指月園

須賀川の人物史

20

うずもれていた洋画家

ひろ
せ
か
きち
広瀬嘉吉(一八八七—一九五二)

広瀬嘉吉は、生存中そして

没後とも須賀川の歴史の中ではあまり話題にものぼらなかった人物で、県史や市史の中には氏名すら載ることもなかった。

没後とも須賀川の歴史の中ではあまり話題にものぼらなかった人物で、県史や市史の中には氏名すら載ることもなかった。

セザンヌの

理論を吸収

嘉吉が突然、近代洋画の壇上に現れたきっかけは、今春四月八日から五月七日まで福島県立美術館で行われた「生誕百年記念 中村藤・中原悌二郎と友人たち」の、大正時代を代表する洋画家と彫刻家の作品による企画展で、二年前から茨城県立近代美術館、東京都練馬区立美術館、県立美術館の共同企画で準備が進められていた。県立美術館学芸員の岡部幹彦さんが、収集資料の整理中に嘉吉の存在を見出し、彼の作品について「デ

彫刻家萩原守衛の 影響を受ける

四十年、彼は中村、中原らと前後して、太平洋画会研究

所に移り、中村不折、満田国四郎の指導を受けながらミケランジェロやロダンの画集などによって西洋美術の研究をしながら、研鑽に励んだという。四十二年六月には、中村、

中原と共に彫刻家萩原守衛を訪ねた。このとき萩原から受けた影響は、特に大きかったといわれている。この時期、七月号の「人物史」で紹介した渡辺光徳も上京して彼らと同じ太平洋画会研究所に入り学んだのであった。くしくも嘉吉、藤、光徳は同じ年齢で、中原は一歳年下であった。

嘉吉は、大正四年から九年まで須賀川に帰り、指月園(現大町)の一室で絵筆をとっていたと伝えられている。今回の展覧会に出品された「須賀川風景」は、この時に描かれたものといわれている。

この時期、彼は、白河町中町の資産家で多くの芸術家の後援をしていた伊藤隆三郎の援助を受けていたという。

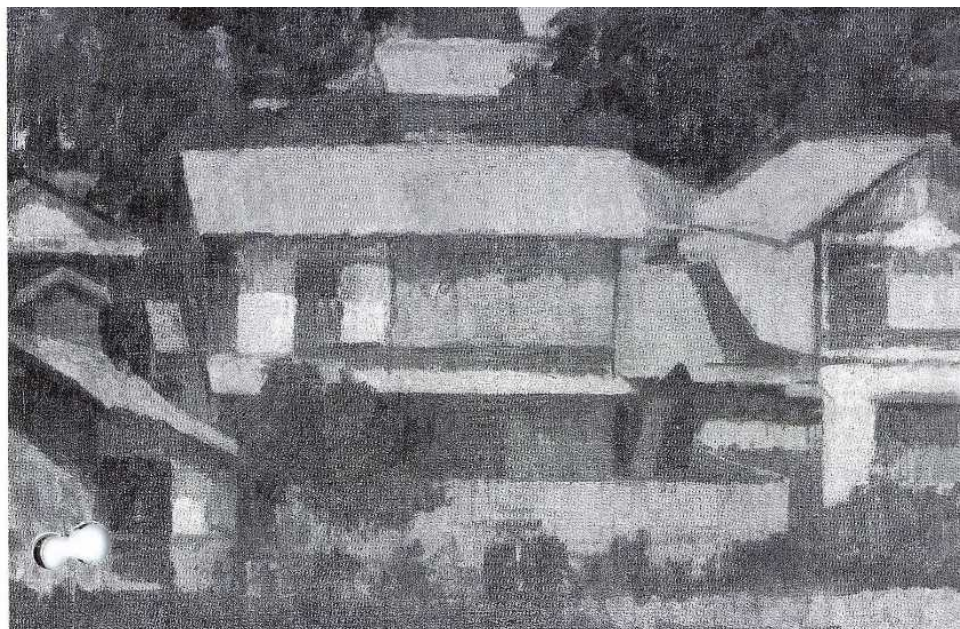
九年、再び上京した嘉吉は、日本美術院の彫刻部に通い、勉強を始めたが、家庭の事情で中断して、十三年三月、宇都宮に居を構えた。藤は、次のような

手紙をあてている。「(前略)それはそうと今度宇都宮で展覧会をやるそうだね。内々に、静物が沢山出来てゐるのではないか。かくして置かずに、のがあつたら是非もつて来て見せてくれないか東京の金塔社の連中はどういふものかこの頃すっかり熱を失つて皆んな沈滞してゐる。どうかいつものを二、三枚もつて来て皆んなの眼をさましてやつてくれ。(以下略) 藤

嘉吉兄」

と彼の作品を評価していたがその後、中央画壇との交流もあまりなく、その後、戦時下になり、専ら出征兵士などの肖像画を描き、持ち前の技量を公にすることなく、昭和二十六年十二月二日宇都宮市操町一丁目三十三番地の自宅で、六十四歳の生涯を終えた。

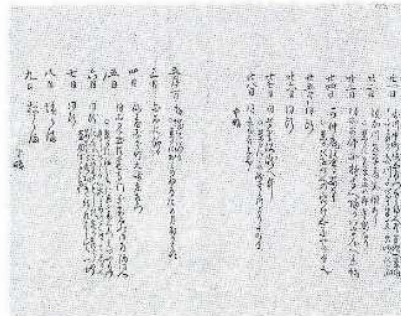
現在、嘉吉の油絵の作品で知られているのは十五点くらいといわれている。これは無名画家の作品として片隅に置かれていたためではないかと思われる。今後、これら眠っている作品を一点でも多く見出し出して日の目をあててやりたいと思う。(永山祐三)



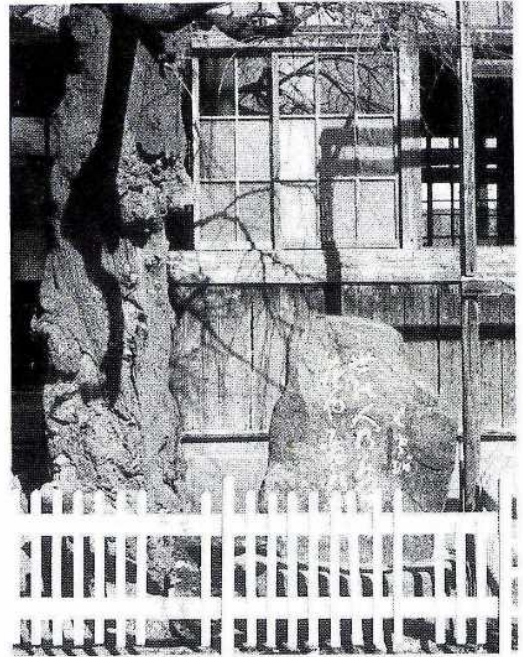
「須賀川風景」 油彩 60.5×72.9cm



雨考肖像画



青蔭集の一部



八幡社境内(現市役所前)に雨考らが建立した「軒の栗」句碑。現在は可伸庵跡に

須賀川の人物史

(21)

青蔭集を編集した石井雨考(一七四九〜一八二七)

亜欧堂田善が挿絵を描く

江戸俳諧の希観本として出版界や俳文学会から注目されている「青蔭集」は、百七十五年前の文化十一年(一八一四)、諏訪町の酒造業で俳人の夜話亭雨考が編集、発行した俳諧書である。

江戸俳諧の希観本として出版界や俳文学会から注目されている「青蔭集」は、百七十五年前の文化十一年(一八一四)、諏訪町の酒造業で俳人の夜話亭雨考が編集、発行した俳諧書である。

江のちに田善は、この時期、仕えていた白河藩主松平定信(楽翁)が、家督を嫡子定永に譲り、隠居していたので、楽翁から暇をもらい、須賀川に帰っていた。帰郷後の作品として高く評価されているのが前の市原多代女が書いた。

雨考は、寛延二年(一七四九)、渡辺恒右衛門の子として生まれ、後に、父と共に石井家に入ったといわれている。本名を久右衛門といい、子供

この本が各方面から注目されている要因は、挿絵と曾良の「おくのほそ道随行日記」の収録にある。当時の挿絵は、一般には著名で伝統的な各派の画家か、浮世絵画家に揮毫を依頼したのであったが、雨考は隣家の亜欧堂田善(広報一月号参照)に銅版画で「陸奥国石川郡大隈滝芭蕉翁碑之図」の制作を頼み、彼は同書に次のように記している。

彼は、この句碑の建立にあたり、芭蕉崇敬の証として、青蔭集を編集したのではないだろうか。また挿絵のほかに、注目されていたのは、当時ま

それは俳壇における彼女の地位が確立されつつあることを認めたからであろう。

小林一茶も句を寄せる

全国の俳人からも多くの俳句が寄せられている。主な俳人としては、大伴大江丸、井上士朗、金令道彦、小林一茶、松窓乙二、建部巢兆などである。跋文は出版元となった、江戸浅草蔵前の札差で、俳人の夏目成美(一七四八〜一八一六)が書いた。また、道彦、巢兆と共に、江戸三大家といわれていた。成美は、文人画家としても知られ、雨考との関係で、市内にも数点の作品が残っているという。特に、市役所前にある芭蕉記念館に展示されている「芭蕉像」は、黒染めの居士衣を着て扇子を膝に立てて座る風骨を帯びている画像である。

のころから、俳句を徳善院の僧二階堂桃祖に学び、二十三歳の時、諏訪の森の傍らに庵を建て、俳人との交遊の場とした。

この庵に桃祖は「夜話亭」と名付けた。また文化七年夏、成美は、夜話亭の周囲の環境

と雨考の人柄から、庵の地を「秀海」として、記念に「秀海の記」を揮毫して贈った。雨考は、俳諧活動の一つとして市内の俳人たちと木版で絵入りの「俳句刷り」を発行した。挿絵は田善の描いたものが現在四点確認されている。

が、特に文化十年に出したものは、十九・五×百四センチの特大判で、俳句刷りとしては、あまり類がないものである。田善の「蜆売りの図」に道彦、多代女、桐宇、旧台、雨考など十二人の俳句を入れ、終わりに「みちのく須賀川連」

(旧矢部椿郎コレクション現市立博物館蔵)とある。

田善の画に雨考が俳句を賛した幅物も数点残されているが、これは二人が年齢も一歳違いで、仲の良かった友達であり、後に、両家の子供たちが縁組みをしたためでもあると思われる。

三度移転した 「軒の栗」句碑

雨考は、晩年の文政八年、芭蕉の俳句「世の人のみつけぬ花や軒の栗」の句碑をゆかりの地、八幡社境内の枝垂れ桜の許(現市役所前駐車場)に竹馬、英之、阿堂と共に建立した。しかし、この句碑は三度場所を変えられた数奇な運命をたどり、現在はNTT裏の可伸庵跡に建てられている。

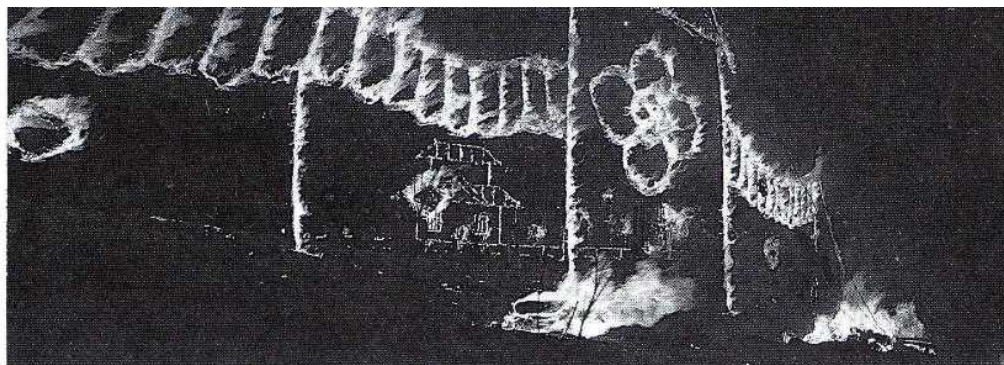
このように家業の傍ら、芭蕉を尊敬し、地方俳壇の指導者として一生を送った雨考は、文政十年七月六日、「わが命どの朝顔の露ならむ」の辞世の句を残し七十八歳の生涯を終えた。

須賀川の人物史 ②②

政略の犠牲になった姫

岩瀬御台

(一五八五〜一六三九)



ムジナ狩りに こと寄せる

松明あかしは、この戦いで戦死した多くの人々の霊を弔

うため、新しい領主の目をはばかり、ムジナ狩りにこと寄せて、続けられてきた火祭りです。

昔は旧暦の十月十日でしたが、現在は新暦の十一月の第二土曜日に五老山で行われて

います。この五老山は、天正九年、三春城主田村清顕方と須賀川城主二階堂盛義の老臣五人が和睦の交渉をしたことから、五老山と呼ばれるようになった所です。

三千代姫悲話

また、松明あかしに行われる姫行列には、悲しい物語が秘められています。

会津黒川城主の 二女として生まれる

須賀川城は、四百年前の戦国時代、天正十七年(一五八九)十月二十六日、米沢の伊達政宗に滅ぼされた。当時の仙道筋は、政宗を頂点として同族同士が血で血を洗う葛藤の世の中であった。そのような中で多くの女性は、ドロドロした渦の中に巻き込まれ、政略の犠牲となって一生を送った。その一人に二階堂家の血をひく岩瀬御台がいた。

彼女は、天正十三年(一五八五)会津黒川城主、芦名盛隆の二女として生まれた。

盛隆は須賀川城主、二階堂盛義の嫡子であったが、永禄九年、芦名盛氏との戦いで敗れ、黒川城の人質となった。盛氏は、嫡子盛興の妻に伊達晴宗の四女を迎えた。しかし、病弱であった盛興が亡くなったので、盛隆を芦名の跡つぎにして、盛興の後室と結婚させ、一男二女を儲けた。彼女は大乗院の妹で、盛隆の叔母であ

る。盛隆の後見としてにらみを利かしていた盛氏が亡くなると、盛隆は、男色と酒に溺れ、天正十二年(一五八四)十月六日、三十三歳のとき家臣の大庭三左衛門に斬殺された。

この年、政宗は十八歳で伊達家を相続、仙道筋を我が手の中に入れるべく企てていた。

年代が前後するが、天正九年八月二十六日、盛義が病没。後室の大乗院は尼になり、須賀川城主となった。また、跡つぎに孫娘である盛隆の二女を養女とした。

その後、政宗は政略結婚によって親戚同士となった一族に、妥協のない戦いを挑み、須賀川城も落城した。このとき落ちのびて行く身

鎌倉時代の文官であった須賀川領主二階堂為氏は、一族の治部大輔を代官として、岩瀬地方を治めさせていました。しかし、治部は大変横暴なやり方をしていました。このため、文安元年(一四四四)、為氏は須賀川城に入ろうとしたが、治部は入城を拒み、娘の三千代姫を為氏に嫁がせ、三年後に城を明け渡すことを約束したのでした。為氏は、和田城主須田美濃守の好意で、和田大仏南の岩間城で待ちました。ところが三年たっても城を明け渡さないで、涙を飲んで三千代姫を離縁し、送り返して、治部を討ち入城しようとしていました。三千代姫を和田から送り返す途中の暮谷沢で、両軍が激しい戦いとなり、三千代姫は進退窮まらず、「人間はば岩間の下の涙橋流さでいと暮谷沢」と、辞世の歌を詠んで自害しました。

の大家院は、一人の幼い姫を連れて岩瀬仁井田、福島杉の目、磐城平から常陸佐竹家に身を寄せた。この姫が、佐竹義宜の奥方となった「岩瀬御

台」である。慶長七年（一六〇二）、佐竹家は、水戸から秋田に国替えになり、新しく築かれた久保田城（秋田市）に入城して、



須賀川史談会が岩瀬御台の墓参

須賀川史談会会員は秋田を訪問し、天仙寺にある岩瀬御台、須田美濃守、須賀川衆の墓参をしました。（昭和63年10月4、5日）

間もなく彼女は、十八歳の若さで離縁された。

彼女は、横手城下の屋敷で余世を送ったが、義宣からの二百石の化粧料と数々の贈り物に愛を感じ、自らの立場をわきまえながら、義宣没後の寛永十六年（一六三九）八月八日、破乱にとんだ生涯を閉じた。五十四歳であった。

二代藩主義隆も彼女へのいたわりを忘れることなく、葬儀は藩によって執り行われた。なぜ離別した女にそれだけのことをしなければならなかったのか、それは佐竹氏が水戸五十四万石から秋田二十万石に減封、国替えとなったとき、新藩創設の犠牲となった彼女への藩として最大の栄誉をもつての報いといわれている。菩提寺の横手市天仙寺にあ

る位牌のホゾの部分に「天英様（義宣）の御台なり、わけこれあり天仙寺において御葬式あいすますものなり」と小さな文字で記されている。「わけこれあり」は、彼女が背負って来た二階堂、芦名、佐竹、伊達の血のためではなかったのか、また、義宣は政宗の背後に見える家康の大きな影におびえていたためであるという。（永山祐三）

いかに戦国の世とはいえ、夫と父の板ばさみの悲しい物語に、昭和三十年、竹内憲治さんによって暮谷沢の涙橋に碑が建立されました。また、昭和六十三年四月には、三千代姫堂建立実行委員会が三千代姫像を安置するお堂を建立しました。

この編集にあたっては、村越幸司須賀川史談会長にお話を伺いました。

四百年前の天正十七年（一五八九）十月二十六日、仙道筋と会津街道、岩城街道が交差する交通の要衝にあった須賀川城は、会津一円を我が手中に入れた米沢城主伊達政宗に滅ぼされた。このとき、須賀川城主は二階堂盛義の後室「大乘院」、四十七歳。また、政宗は、独眼竜の異名をとる奥州の暴れ者二十三歳であった。この攻防戦は、伯母と甥の「骨肉相食む」戦いで、大乘院は戦国時代の女城主として、今に語り継がれている女傑である。

須賀川の人物史

(23)

須賀川最後の主

大乘院

(一五四二—一六〇三)

伊達政宗の伯母

大乘院は、天文十一年（一五四二）のころ、伊達郡西山城（国史跡、桑折町）に居城していた伊達家十五代晴宗の長

女として生まれた。のち、彼女は従兄の二階堂家十八代盛義（盛義の母は晴宗の妹）に嫁いだ。彼女は盛義との間に盛隆を生んだが、盛義は永禄九年（一五六六）、会津黒川

られた。

その後、盛氏が隠居して嫡子盛興が家督を継いたが、病弱のため三十九歳で没した。ここで盛氏は人質の盛隆二十五歳を跡継ぎにして黒川城主とした。

城（若松城）芦名盛氏と争いを起こして敗れ、嫡子盛隆十六歳が人質として黒川城にと

盛義の没後

女城主に

また、盛興の後室（晴宗四女、大乘院の妹）二十四歳を盛隆の妻にして、三女を儲けたが、夫婦仲がうまくゆかず、盛隆は、男色と酒に溺れるようになった。このころ、須賀川城主二階堂盛義が病没。後室は尼になり、城主として、領内の安定に努めた。家臣は、その威に服したという。彼女は盛隆の行状をいさめ、彼らの仲もうまく行くようになつて、男子亀王丸が生まれた。



400年前の伊達政宗との戦いを慰めるかのように燃え盛る松明あかし

孫の出生を喜んだのもつかの間、盛隆は、天正十二年（一五八四）十月六日、三十三歳で寵臣の大庭三左衛門に斬殺された。これは、大庭が寵愛の衰えを恨んでの犯行といわれている。

二年後、大乘院には不幸が重なり、かわいがっていた孫の亀王丸が疱瘡にかかり、わずか三歳で命を落とした。このとき、芦名家では相続争いが起き、伊達政宗は弟の小次郎を入れようとした。政宗に反発

して二陸堂、芦名、佐竹連合ができた。それは、政宗が仙道筋の一族に妥協のない戦いを挑んでいたからであった。

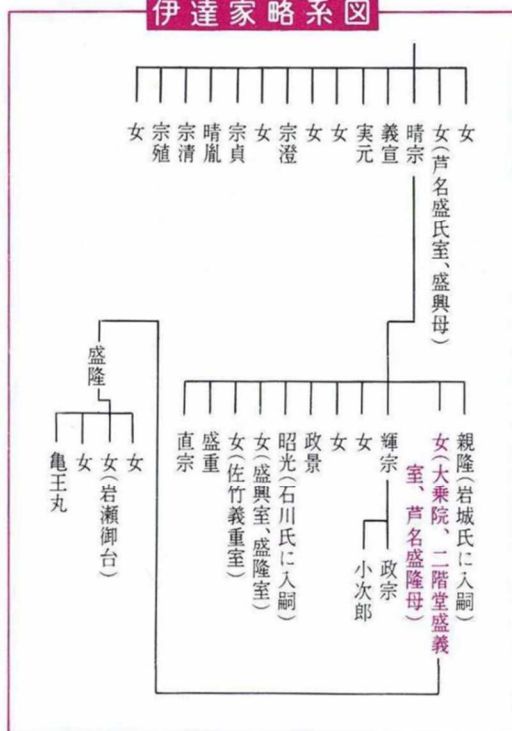
二階堂家四百年の幕を閉じる

政宗は、天正十七年六月五日、芦名義広を磐梯山麓摺上原に破り、黒川城に入城した。

六月十一日、豊臣秀吉は上杉景勝、佐竹義重に政宗討伐を命じた。政宗は九月、家臣の上郡山仲為を使者として、秀吉に芦名討伐の弁明をした。

その翌月の十月、須賀川城攻略にかかった。そのとき、須賀川城内には、政宗に内応していた二階堂家の重臣がいた。これを裏付ける政宗の書状が、近年発見された。その書状には、城内状況を知らせ、政宗の出馬を促した書状にこたえて、政宗が承知したとの礼状である。日付は十月二十一日亥刻（午後十時ごろ）、あて名は「南左近大輔」となっている。この人物は、「保土原左近行藤入道江南斎」ではないかと思われる。ちなみに保

伊達家略系図



土原氏は、落城後仙台に移り、伊達家一家となった。

このような状況のもとで、政宗は十月二十日、黒川城を出発、二十一日、安積郡片平城に到着、前記の書状はここで書かれたという。二十五日から須賀川攻めを開始、同時に和議の申し入れをしたが、大乘院は聞き入れることなく、二十七日、落城に追い込まれた。

佐竹家に身を

寄せた後須賀川に

落城後、政宗は新しい館を建て、大乘院を迎えたい旨を示したが、彼女は、それを振

り切り、実兄の岩城親隆（平）を頼り、のちに妹の嫁ぎ先、佐竹家（水戸）に身を寄せた。慶長七年（一六〇三）、佐竹家は秋田に国替えが決まり、彼女もその移封の旅に同行するが、病の身で旅を断念。思いの出の地、須賀川にとどまり、六月十四日、乳母・高橋菊阿弥の草庵で六十年の生涯を終え、菩提寺の長祿寺に葬られた。

（永山祐三）



大乘院のお墓（長祿寺にある）



戦国女将大乘院と岩瀬御台を熱演した「宝井琴桜大講談会」。10月14日、市中央公民館

須賀川の人物史

24

須賀川城代

須田美濃守盛秀と天仙丸

天正十七年（一五八九）十

月二十六日、須賀川城の最後の一兵が倒れたのは申の下刻（午後五時）ごろであった。

伊達家治家記録に「本城が

落城した後までも任務を守り戦死すること実に希代の事なりと皆嘆美す」とある。ここに中世の須賀川、岩瀬地方を、四百年に及び支配した二階堂

家が終わった。この戦いは「大乗院と政宗」との戦いであつたが、二階堂家臣団の戦いでもあつた。戦後、多くの家臣たちは、それぞれに身の振りかたを決め、水戸佐竹家、仙台伊達家に仕官して須賀川を離れた。

礫にされた初陣の天仙丸

盛秀は東部衆を引き連れ、大乗院、矢田野安房守、遠藤

和田に居城して東部を支配していた。

盛秀は二階堂盛義亡き後、須賀川城代を勤め、政宗の須賀川攻めのとき、政宗からの賀川攻めの際、政宗からの和順の申し入れを受け入れるよう大乗院に建言したが、容れられなかった。

雅楽頭、水戸・佐竹家、岩城・岩城家からの援軍と共に城に籠り、伊達勢と戦った。

このとき、盛秀の長男、源一郎広秀（天仙丸）は十六歳で初陣。華やかな稚児鎧を身に付け、飾りたてた馬に乗り、戦場を駆け回っていたときに、崩れてきた塀に押し倒されたところを伊達勢に取り押さえられた。

政宗は戦いが終わって三日後、逆らった者への見せしめとして天仙丸を山寺山王山の谷あい立てた礫柱に縛りつけ、駆り集めた群集の前で高

機敷から百玉の鉄砲で打ち殺した、と藤葉栄哀記にある。遺骸は下宿・奥州道わきに埋められ、稚児ケ塚といわれた。また処刑の場所には農民の手によって土手が築かれ、用水池となり、稚児ケ池と名付けら

れたが、いつのころからか「築後塚」「築後池」と替えられて今に伝えられている。

盛秀は

須賀川衆を預かる

慶長七年、佐竹家は水戸から久保田（秋田市）に国替えとなり、石高も八十万石から二十万石に減った、これは関ヶ原の戦いで豊臣家に加勢したためであった。佐竹家と行



松明あかしの武者行列で勝ちどきをあげる二階堂侍



天寿をまっとうした牡丹を供養する「牡丹焚火」(11月19日)

会津には「木の根明く」という春の季語がある。春になって木の根の周囲の雪が解けて穴があいたようになることである。会津の俳人が誇らし気に説明してくれる会津だけの季語である。いわゆる一流の出版社が出している俳句歳時記

には、この「木の根明く」は当然のように載っていない。俳句歳時記に載っていないくとも、会津の俳人は春の季語として俳句を作っている。私はそれでいいと思う。その土地の風土が、昔から慣れ親しんできた言葉（季

動を共にした盛秀は、のちに横手に移り、横手城代を勤めた。秋田に移った二階堂家の家臣団を盛秀が預かり、「横手大番衆」「横手須賀川衆」として今日に続いている。

また盛秀は、長男広秀（天仙丸）の冥福を祈るため、城下に金剛山天仙寺を建立した。この山号、寺号は、須田家の菩提寺であった和田の金剛院と広秀の法名天仙清公大禪定門からつけられた。天仙寺は岩瀬御台と横手須賀川衆の菩提寺でもある。天仙寺と金剛院はともに長祿寺の末寺である。

盛秀は城主として武将として戦国の世を生き抜き、寛永二年（一六二五）八月三十日、九十三歳の生涯を終えた。

（永山祐三）

江戸時代後期から ガラス製造へ

人間は昔から、光を通して輝く物に魅せられていたようである。

奈良時代になると、外国との交易も行われるようになり、ローマや中近東で作られたガラス製品もシルクロードを通じて舶載された。しかし、これらガラス製品は限られた階級の人々の所持品であった。ガラスが輸入されて約千年の間、日本ではガラス製造は行われることなく舶来品が

珍重されていたのである。

江戸時代後期から末期にかけて先見の明があった藩主たちはガラス製造に着目した。

江戸期のガラスとして一般に知られているものに長崎ガラス、薩摩切子、江戸切子などがあるが、他の藩で作られたガラスは、前記の有名ブランドの陰に隠れて、あまり知ら

須賀川の人物史

須賀川ガラス創始者

安藤辰三郎

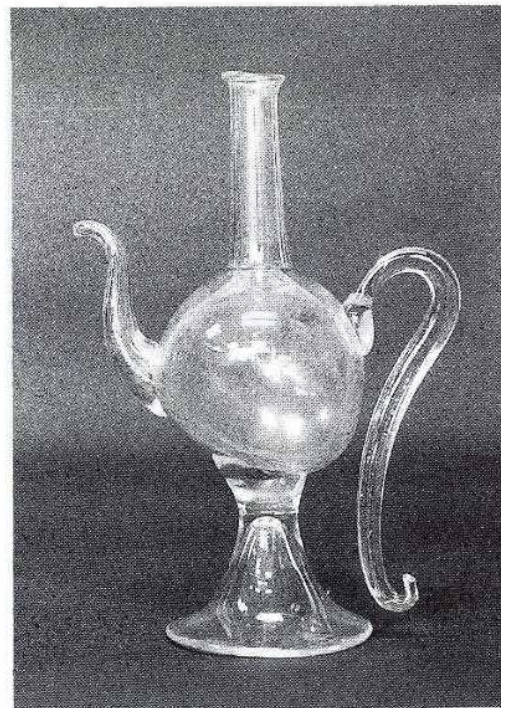
れることがなかった。

ガラス製造が行われた。

松平白河藩主の 産業振興策

この時期、須賀川でも白河藩主松平定信（一七五八―一八二九）の地域産業振興策で

定信は、寛政年間（年数不明）、郷士安藤辰三郎にガラス製造を命じ、長崎からビイドロ工人相谷氷壺を招聯して製造を開始した。定信も寛政十二年（一八〇〇）八月、飯坂温泉行の日記の中に「今日は須賀川へゆきて（中略）玉



水差し。創業のころのものとされる。比重三・九四、鉛の含有量は五〇％に近い

員土屋良雄氏によって学術調査が行われ、初期の製品と思われるものは比重が三・九を示し、鉛の含有量は五〇％に近く、淡黄色を帯びた不純物や気泡の少ない、光沢のある良質の鉛ガラスである。

やや時代の経ったものは、比重が二・四を示し、色も薄い淡黄色で鉛の含有量も少なくなっている。

板製するを見」とあり、藩としても援助していたと思われる。ガラス工場は安藤家の屋敷内（現加治町）に建てて明治十年代まで約九十年間位製造していたようである。

不純物や気泡の 少ない淡黄色製品

須賀川ガラスとして現在確認されているものは、十点足らずであるが、これらガラス製品はサントリー美術館学芸

らは硝子印。仙台瑞鳳寺十五世南山古梁禪師からは、硝子磐子のことを記した書簡が伝えられている。また、明治九年に明治天皇東北御巡行の日記にも「ガラス燈籠二本出来度旨、区長ヨリ談有之直二手配」とある。

先祖は

二階堂家の家臣

辰三郎は、二階堂家の家臣であつた安藤十郎太夫を先祖にもち、代々町役人を勤め、八代重憲の長男として生まれた（生年月日は不明）。彼も郷土として町役人を勤め、文化元年には第二敷教舎訓導掛となつた。年代が前後するが寛政六年（一七九四）、松平

定信が領内巡視のため須賀川に来て休憩したとき、田善の「江戸芝愛宕山図」屏風を目にとめたのも辰三郎の家であつた。ここから亜欧堂田善が生まれたといつても過言ではないだろう。彼もまた舊臺と号し、石井雨考と共に俳句を作り、青蔭集などにも入集している。このように産業、文化、教育と各方面に尽力して文政十一年（一八二八）九月一日没し、長祿寺に葬むられた。

（永山祐三）

写実的作品と 意欲的に発表

明治四十二年(一九〇九)、
二十二歳の水野仙子(本名服部テイ)は、文章世界に推薦
で小説「徒勞」を発表し、将
来を囑望されて文壇の人とな

つた。
四月に上京。自然主義作家
として活躍していた田山花袋
の内弟子となつて執筆生活に
入る。「写実的作品で人生観照
の高い境地を示した作品」を
次々と発表。作家としての地
位を築きあげていたが、大正
五年、二十九歳のとき、肋膜
炎にかかり、その後、腎臓炎、
腹膜炎を併発、闘病生活を送
りながら執筆活動を続けてい
た。が、「酔ひたる商人」を絶筆
として、大正八年(一九一九)
五月三十一日、脳膜炎を併発
し、姉の服部ケサ(広報六十
三年三月号人物史)に看取ら
れながら、群馬県草津温泉「聖
バルナバ医院」で、この世を
去った。三十一歳であつた。

須賀川の人物史

(26)

自然主義を代表する女流作家

水野仙子

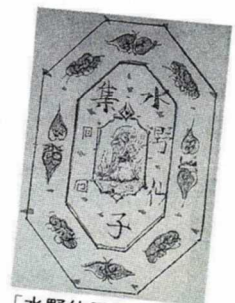
(一八八八—一九一九)



水野仙子

夫川浪道三が 仙子集を発売

この間、仙子の作品は数多
くの文芸誌に発表されたが、
単行本としての発行はなかつ
たので、夫の川浪道三(歌人、
作家)は、彼女の作品の中か
ら二十二編を選び、妻へのほ
なむけとして「水野仙子集」
を刊行した。



「水野仙子集」

近代洋画の巨匠 岸田劉生が装丁

道三は、刊行にあたり、序
文を師の田山花袋に、装丁を
近代洋画の巨匠、岸田劉生に
依頼した。劉生の日記の中に
仙子集のことについて、次の
ように記してある。

大正九年三月二十三日(火)

晴

川浪道三会場に來り故水野
仙子集装幀をたのむ。故人に
は好意あり快く承知す(註
新橋流逸荘、劉生個展会場)

五月一日(土)雨

約束の水野仙子集の表紙か
く。古い渋い単純な黒と赤の
味でうまく行く。先日表慶館
で見た素描単彩の味を参考に
した。(註醍醐寺宝物展)

五月八日(土)晴後雨

伊上凡骨が水野仙子集その

水野仙子(本名・服部テイ)

小説家。兄の躬治は歌人、姉のケサはライ患者に一生を捧げた女医として有名。

他の表紙刷見本持つて来る。色は少しいけなが皆よく出来てゐる。

とある。このようなことから察すると、劉生と仙子は、芸術上の交流で互いに作品を見つめ合い、劉生も仙子の作品を本物と認めていたから、装丁を快く引き受けたものと思われる。(表紙絵はカット参照、裏表紙には「水仙」の花が描かれている)

田山花袋が 序文を寄せ

また、師の田山花袋は「お貞さんの集の前に」と題して序文を寄せている。

その中に「お貞さんの生まれた須賀川といふところは、昔からあたりにきこえた商人町で、郡山や白河や、二本松に比べて、何方かと言へば、士魂商才のその商才の方に属する気分の漲った町であった。従つて、お貞さんには、士族の娘といふところはなかつた。何うしても堅い田舎の商家の娘であつた。それに、何処をさがしても浮華なところ、軽薄なところが多かつた。全身すべて是れ誠とふやうな人であつた」と、仙子と当時の須賀川人の気概などを述べている。

水野仙子は、本名服部テイといひ、明治二十一年(一八八八)十二月三日、東四丁目四番地(現本町)の商家ランブ釜屋、服部直太郎の三女として生まれた。

十八歳のとき、須賀川裁縫専修学校卒業。その後、裁縫塾に通う傍ら、文学についての研さんを積み、女子文壇、文章世界などに投稿、雅号を水野仙子とした。

女流文芸雑誌 「青鞥」にも参加

二十二歳のとき、彼女は、前述の「徒勞」の発表によつて上京。田山花袋の門人となつて文筆活動に入つた。その後、「お波」娘」などで作家的地位を築いた。

自我の主張と拡充を旗印にした女流文芸雑誌「青鞥」に参加。この年、札幌出身の作家川浪道三と結婚したが、半年後、夫道三は肋膜炎にかかつた。新婚時代の作品からは、彼女の身の上をうかがうことができるものもある。

大正四年九月、読売新聞記者となるが、五年五月、彼女も肋膜炎を発病。養療生活を続けたが、運命をどうすることもできなかった。

没後、夫の道三は遺骨を分骨し、東京神司ヶ谷墓地と、仙子の実家服部家の菩提寺、池上町の十念寺に葬つた。墓碑には「川浪道三妻貞子之墓」と刻まれている。

(永山祐三)

墨こんあざやかな

気品のある筆さばき

今から八百年前の平安時代、王朝文化の栄華を道の奥の地に伝える平泉中尊寺金色堂。その参道に建てられている標柱の文字は、碑面に空間を余すところなく金色堂にふさわしい人を引き付ける筆致である。

この標柱は、加治町妙林寺の住職であった張堂寂俊（号龍禪子、大龍）が大正十二年（一九二三）、東北地方巡錫のとき、中尊寺から請われて揮毫したという。現在の標柱は石製であるが、元の標柱は木製で墨こんあざやかな上に気品をただよわせていた。

昭和四十三年五月、金色堂は昭和の大修理が完成し創建時の莊嚴さを再現した。このとき標柱の建替えが計画され、当時の中尊寺貫首、今春聴（ペンネーム、東光）師は、龍禪子の墨跡を惜しみ石柱に再刻する決定をしたといわれる。

「筆禅一致」を提唱

門弟1万人

寂俊は、明治九年（一八七六）三月八日、伊達郡飯野村大字飯野字町七十八番地張堂慶山の長男として生まれた。張堂家は、東聖山五大院という本山派修験聖護院に属する中世から続いた家柄である。彼は、幼名を俊鷹といい、書の上手な子供として評判で

坂寂栄のもとで得度した。その後、天台宗中学校から天台宗大学東京支校に入学。僧侶としての勉学を修め、三十一年九月、二十三歳で妙林寺六十八世の住職となった。さらに研鑽を積むため、天台宗の本山比叡山に登り、「顕密禅戒」の奥義を会得したが、禅については京都妙心寺（臨済宗）南天坊中原鄧洲禅師について七年間修業して許可を得た。

書のほかにも

自画賛の達磨なども

作品も全国各地に数多く残されている。作品には時期によつて次のように「号」が款記されている。初期（十八〜三十一歳）蓮舟・露月・碧崖。入木道継承後（三十二〜四十九歳）龍禪子。五十歳以後は大龍として、書のほか自画賛の観音像、四君子、竹、蘭、菜根、龍、達磨などがある。

特に達磨は東京在住時、愛読閣で描いた百図百態がある。この作品は新宿三越で展覧され、須賀川にも数点伝えられている。

須賀川の人物史

入木道第四十六世を継承

張堂大龍

（一八七六〜一九四七）

27

あったという。十歳のとき、一日掛りで観音像を描き、母に見せたところ、母は画像に手を合わせ、彼の大成を願ったと伝えられている。

十六歳のとき、仏門に入り、川俣町、天台宗大円寺住職西



角田磐谷画「大龍像」



大平12年に、大龍が揮毫した平泉中尊寺金色堂の標柱

太宰府観世音寺の 寺号碑も揮毫

市内妙見山須賀神社わきに自然石の大碑があり、「霊光」と刻まれている。この書を揮毫したときには、筆の先から光が発したといわれている。

また「都府楼はわずかに瓦の色を看、観世音寺はただ鐘声を聴く」菅原道真の詩で有名な九州太宰府観世音寺の寺号碑も彼の揮毫である。ちなみに、彼の妻リヤウは福岡市の出身である。

疎開準備をしていた貨車三両分の三十余年間の作品、提唱の原稿や荷物などを全部焼き尽くし、体だけの帰山となった。帰山後も筆を持ち続けたが、戦災で受けた精神的疲労から、昭和二十二年（一九四七）十月二十日、東九丁目（上北町）の寓居で七十一歳の生涯を閉じた。（永山祐三）

須賀川の人物史

(28)

関下人形座育ての親

豊竹姫太夫
(?~1888)



昭和53年県の重要民俗文化財に指定。人形の一部は、市立博物館に展示されています

江戸から大正時代に かけて150年続く

江戸時代、安永年間(一七七〇)から大正時代(一九三〇)までの約百五十年間、市内関下では、操人形結城座を組織して近郷の祭礼や農閑期の娯楽として、ほかの村を興業して回り、人々から「関人形」と呼ばれて親しまれていた。が、大正十二、三年ころの西袋村山寺山王様(日枝神社)の秋祭りでの上演を最後に、一座の幕を降ろしたといわれている。

それから四十年後の昭和三十九年二月、関下地藏堂境内の郷倉(備荒米倉庫)と、最後まで人形芝居の座長として、区の人たちを指導していた根本伴右エ門の孫、正忠家の土蔵から、数多くの操人形と関

係資料が発見された。

これらの資料は、早稲田大学教授杉野橋太郎、人形芝居研究家永田衡吉、洋画家で首の研究家斎藤清二郎先生らの長年にわたる調査の結果、関下人形は質、量ともに全国屈指の資料であることが明らかになった。

なぜ関下に人形芝居が定着したのであるのか?。江戸時代の関下は、長沼藩領三万石のうち、仁井田村二千七百八十四石余り(天保郷帳)の、金喰川(滑川)の河岸段丘に開けた小さな集落であった。地名は金喰川の「堰」に由来する。

ドサ回り一座の興業が 庶民の楽しみ

江戸時代の地方の町には、常設の芝居小屋(劇場)などはなく、一年に一回か二回、巡業でやってくるドサ回りの一座を楽しみに待っていた。この一座も天候などに支配されることが多く、観客が不振に終わったとき、帰りの費用をねん出するため、最後の

興業地で人形一式を抵当に、金を工面したといわれている。関下に人形芝居が移入されたのも、このようなことからであったろうといわれている。

姫太夫は人形の 指導で関下に

関下に最初に入った人形類は、古浄瑠璃(一人遣人形)から近松門左衛門の新しい浄瑠璃(三人遣人形)に移行した過度期の江戸系(東京)の古型首であった。その後、文化・文政年間に大阪系(文楽系)の人形類が導入された。この人形類と一緒に、豊竹姫太夫が指導のために来たという。

豊竹姫太夫(豊竹は義太夫節の太夫の家名)は、大阪道頓堀にあった豊竹座(人形芝居)の一門で、義太夫語り(浄瑠璃)であったという。地方巡業で関下を訪れ、関下的一座の人々に大阪系の新しいカラクリの操作方法や浄瑠璃を指導。部落の人たちとも親しくなり、彼は地藏堂を仮住ま

いして居残り、人形芝居の普及に心血を注ぎ、生まれ故郷に帰ることなく、関下の土に骨をうずめた。

「清山浄心庵主

丹波国出生 豊竹姫太夫

文政十一年五月二十二日」

と、刻まれた卵塔型の石塔

が、地藏堂裏の墓地に建てられた。

総勢20人で

人形座を組織

姫太夫亡きあと、一座の維

持と振興には、村を挙げて協力したことが、記録によって

など総員二十人ぐらいの構成であった。

知ることが出来る。また、世話人も、大世話、中世話、若者連と組織化されて、経済的にも地方の人形座としては形態の整った一座で、浄瑠璃、三味線、人形遣、はやし連中

座長として運営に当たっていた人々に、農業の傍ら染屋をしていた根本彦三郎（芸名吉田幸三郎、一八四七～一九一九）根本伴右エ門（芸名吉田冠三、一八三八～一九二一）

根本寅藏（芸名吉川虎吉、一八七二～一九三五）などがいる。

二本松や大信村まで

巡業に出かける

外題帳や興行収入帳から興行地の一部を記してみると、前田川、石川町、舟津、大里、長沼町、岳下村（現二本松市）、大屋村（現大信村）などとなっている。明治四十年ころの一人当たりの日当は、三十銭から六十銭ぐらいであった。

山寺山王様の祭りで

幕を閉じる

大正期に入って新しい時代の流れは、急速に東北の地にも押しよせた。関下人形結城座は、約百五十年間、県内各地を興行し、土地の人々に、人情と娯楽で接してきたが、一座の老齢化や後継者の問題、そして、新しい時代の流れには勝てず、前記の山寺山王様の祭りを最後に一座の幕を降したという。

本名は角田源寿 石川町に生まれる

昭和三十年代の国指定名勝「須賀川の牡丹園」のポスターに、大輪の牡丹の花を的確な描線と華麗な色彩で描き、人々の目を引き付けていた作品があった。この作者は、写

生を本位としての花鳥画を描き、牡丹に魅了され、晩年は牡丹園に近い、和田字柏崎（通称二ツ池）にアトリエを建て、数多くの牡丹を描き、「牡丹の磐谷」といわれ、牡丹園の名勝指定に尽力した日本画家角田磐谷である。

磐谷は、本名を源寿といい、明治二十二年（一八八九）五月五日、石川郡中谷村（現石

須賀川の人物史

牡丹に魅せられた画家

角田磐谷（一八八九～一九七〇）



磐谷が描いた牡丹園ポスター

昭和30年代に4点の作品がポスターになった。全国の駅などに掲示され、評判を呼んだ。



60歳のころの角田磐谷

廣業のもとで三年間修業を積み、「王摩結」を天籟画塾展に出品して初めて世に問うた。この時期の作品には廣業の影響が強く出ているといわれている。

昭和24年

日展委員に推薦

大正九年二月、廣業が没し、彼は、その後、師を求めることなく制作に励み、郷里石川の山中を題材にした「春の若木」が帝展に初入選。その後、帝展五回、文展二回に入選した。この間、何回か特選候補に上がったが、師匠にかなない一匹狼であったため、選ば

れることがなかったといわれている。しかし、昭和二十四年、彼の業績が認められ、日展委員に推薦された。

福陽美術会の第3代幹事長

昭和十六年から十七年の戦時下、磐谷は陸軍省嘱託・従軍画家として、関東軍に派遣され、満州（現中国）各地を写生して、陸軍省に「ソ満国境図」などを納めた。

帰国後、この絵と同じ図柄の「ソ満国境図」を福陽会第十四回美術展に出品した。

福陽美術会は、大正八年四月八日、福島県出身の在京日本画家で結成した組織で、幹部には勝田蕉琴（会長）、荻生天泉（幹事長）、酒井三良、角田磐谷、坂内青嵐などがいた。磐谷は青嵐のあと三代めの幹事長を務めた。須賀川出身の会員は、須田善二（珙中）と渡辺武久（太子庵）がいた。

現在この会は、大山忠作（二本松市出身）が代表幹事となつて運営にあたっている。

隣家から出火で すべての作品を焼失

昭和九年九月三日、磐谷は大きな災難に見舞われた。それは、結婚してから十八年間住んでいた、駒込林町の自宅が、隣家の失火で類焼し、画家としての財産である貴重なスケッチブックや各種の展覧会に出品した作品がごとく失われた。

「屋後展望」が 第15回帝展に入選

この年、不幸にめげず、第十五回帝展出品の制作に励み、軍鶏を題材にした「屋後展望」

が入選した。
「屋後展望」は現在、福島県立美術館に収蔵されている。

同館には、磐谷が県内の名所旧跡などを描いた二十三点の作品がある。



「屋後展望」(182cm×193cm、昭和9年制作)

和田字柏崎に アトリ工を建てる

二十年三月、東京の空襲も激しくなり、彼は家族とともに石川町に疎開した。終戦後の復興が始まり、世の中に活気が見られるようになった二十五五年五月、牡丹園に近い浜田村和田字後町に移り、牡丹の写生に没頭した。その後、三十一年一月、和田字柏崎に居を構え、制作の傍ら、県内の日本画家たちを指導した。

昭和39年県文化 功労賞を受ける

磐谷は、三十九年十一月三

日、画家としての業績と美術界に尽くした功績により、福島県文化功労賞を受賞した。受賞を記念して「画業五十年回顧自選展」を福島市中合デパートで開催。格調の高さと筆致は観覧者を驚かしたという。その後も絵筆を持ち続けたが、四十五年(一九七〇)四月七日、和田字柏崎四十番地の自宅で八十一歳の生涯を閉じた。

磐谷の作品の代表作といわれる、帝展、文展の出品画の多くは、政府買い上げとなり、各省庁に保管、展示されていた。が、戦火と自宅の火災で失われ、現在は、画集や写真でしか見ることができない。市の施設では市立博物館と芭蕉記念館に展示してある。

(永山祐三)

24歳で

須賀川の生産方に

市役所正門の左側に根回り約三層七十センチのアカシアの老木がある。ここに小学校があったころは、夏の暑い日に、児童や近所の人が木陰で涼をとっていた。

このアカシアは明治時代初

須賀川の人物史

③〇

近代須賀川の礎を築いた

橋本傳右エ門

(一八四五—一九〇二)



市役所正面入口左側の針槐(はりえんじゅ)の木

期、生産方として須賀川の発展に尽くした橋本傳右エ門が植えたものである。彼の覚え書「老のくり言」(アカシア樹ノ繁殖)の中で「当町学校へ献木セリ」とある。生産方とは、明治二年(一八六九)、明治政府の新政策として打ち出した勸業行政の組織で、資金として太政官紙幣(金札)が貸し付けられた。

須賀川の生産方は、守山藩

取締役所の管轄にあって、次の六人が元締(役員)として任命された。竹内庄三郎(四十歳)、橋本彦作(傳右エ門二十四歳)、石井勝右衛門(三十歳)、柳沼新兵衛(四十五歳)、塩田治助(四十歳)、柳沼大助(年齢不明)。傳右エ門は二十四歳の一番年下であった。



当時、須賀川の支配は、守山藩から「平・民政局」に移り、二年九月に「須賀川県」が設置されたが、十月に廃県となり、白河県の支配となった。

中町、十一屋の

長男として生まれる

民政局の出先機関になって

からは、一般行政事務まで担当させられ、許認可事務まで取り扱った。事務所は、中町旧白河藩陣屋(今の東邦銀行裏)跡に置かれた。三年八月に、生産方は廃止され、「生産会社(物産方)」と組織変えて役員は十一人となった。

傳右エ門は弘化二年(一八四五)二月十一日、中町(今の中町三十三番地)十一屋、橋本傳五右エ門の長男として生まれた。

十一屋は中町から東町にかけて多くの家作を持ち、米穀や太物(綿、麻の太い糸の織物)を商っていたといわれている。彼は記録によると、明治二年までは名を彦作と称しており、三年から傳右エ門と改名したようである。

県立須賀川病院を

明治5年に設立

生産会社は、その年に役員の変更を行い、頭取に市原又次郎(二十六歳)、頭取並に傳右エ門(二十歳)が就任し、他の役員は年齢も二十四歳から四十二歳と若くなり、活発に動き出した。

五年二月、まず県立白川病院を須賀川に移転し、県立須賀川病院を設立した(今の公立岩瀬病院)。六年「商法会所」、七年「産馬会社」「製糸場」などを設置した。また農業に関しては、西洋農法の研究と導入、荒れ地の開拓を盛んにするよう奨励した。

緑町17ヘクを

舶来馬耕具で開墾

彼もまた、和田原(緑町)に十七町歩(約)の荒野を購入し、外国から輸入した馬耕具で開墾した。ここに横浜から持ち帰ったフランス産馬鈴薯、五個を種芋として栽培

した。土地に適していたためか、多くの収穫があり、のち

に宮城、山形県南部まで普及したという。

冒頭のアカシアは、十年、東京から五本の苗木（一本二十五銭）を購入して植えたものであるが、この木は本当のアカシア（常緑高木）ではなく、針槐（ニセアカシア落葉高木）であった。これは薪炭材に適していたので導入したという。

田善の銅版画を 宮内省に献納

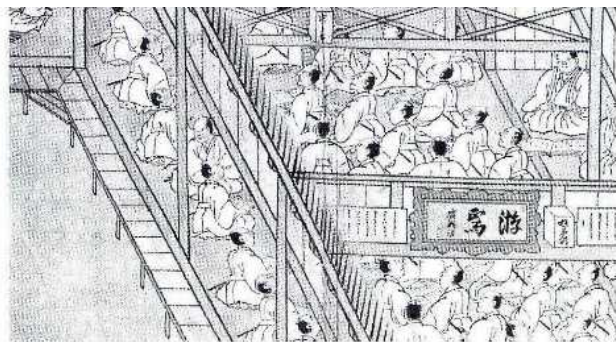
「老のくり言（骨董遊）」の中に「永年ノ事業ニ失敗シ老後楽ミニ書画骨董古瀬戸ヲ集ム（以下略）」とある。彼は、三十二年七月二十四日、収集品の中から亜欧堂田善の銅版

画四十四点、銅原版一点、木版一点の四十六点を宮内省に献納した。現在は東京国立博物館に収蔵されている。今年四月二十一日から六月十日まで福島県立博物館で開催されている「亜欧堂田善とその系譜」展に彼が献納した中から六点の作品と、かつ所蔵していた油彩画「墨堤観桜図」写生帖、「天趣自得説」などが

展示されている。また市立博物館蔵の県重文「六郡絵図」も収集品の一つであった。

このように、産業、福祉、文化と各方面に足跡を残した傳右工門は晩年、岩間三十七番地（緑町）に移り、明治三十四年（一九〇一）九月十日、その生涯を終えた。五十六歳であった。

（永山祐三）



昌平學門所

須賀川の故旧に示す
多年落魄風塵を逐ふ
璞玉沾らず幾許の春

十五にして家を出て三十に
ときを受けた情景である。
して返れば

故郷の人異郷の人に似たり

先祖は須賀川城主

二階堂家の分家

この詩は、のちに湯島学門
所（幕府の学校昌平學）の教
授となった漢学者白井北窓が

北窓は、文政四年（一八二

須賀川の人物史 ③

昌平學で勤王志士を育てた

白井北窓（一八二一～一八七七）

二十七歳のとき、我が国への
外国からの侵入を心配して、
白井八郎右エ門の長男として
単身蝦夷（北海道）に渡り、
生まれた。幼名・佐一郎、名
北方の事情を視察しての帰り
に、郷里須賀川に立ち寄った
家業は定かではないが、彼



北窓の著書「幼學便覽」

が明治二年に出版した「養蚕
新書」の序文に、余も亦岩城
須賀川の人と素より蚕事に精
し」とあることから養蚕関係
の仕事をしていたのではない
かと思われる。

町人の子、北窓がどうして
江戸末期の志士たちと尊王攘
夷論を交わし、近代日本の礎
となったのか、それは彼の家
柄と子供のころの環境にあっ
たと思われる。

白井家の先祖は、須賀川城
主二階堂家からの分家で、二
階堂家の守護神鎌足神社（中
宿）の祭主を代々勤めていた。
江戸時代、北町に移ってか
らは鎌足神社祭礼の神輿渡御
のときは、昼飯の宿になって
いたという。

隣家の吉田柳陰から

教えを受ける

また、白井家の隣家は、北

町庄屋吉田家で、当時、漢学
者として知られていた吉田柳
陰（一八〇〇～四一）がいた。

北窓も、子供のころから、
勉強が好きであったといわれ
ていることから、家業の傍ら、
柳陰について漢詩などの教え
を受けていたのではないかと
思われる。

15歳で上京

安積良斎に師事

十五歳のとき、父八郎右エ
門が他界。彼は志を立てて上
京し、朱子学派の儒者松崎謙
堂（一七七一一八四四）の
門を叩いた。その後、二本松
藩出身の昌平學教授安積良斎
（一七九一一八六〇）に師
事。経書（四書五経の類）と
漢詩について学んだ。

彼はまた国事について大志
を抱き、前記の蝦夷地視察後、
外国からの侵入に対しての海
防策をたびたび幕府に進言し
たという。このような動きの
中で、彼は、同志の清川八郎、
安積五郎などと共謀して横浜
港に停泊中の外国船焼き打ち
を企てた。が、事前に発覚し

て未遂に終わった。事件に加わった者で捕えられた者もいたが、北窓は幸い免れることができたという。

湯島学門所の教授には42歳で

文久三年（一八六三）、四十二歳のとき、湯島学門所の教授に迎えられた。その翌年、

甲府（山梨県）徴典館の学頭に任命された。が、まもなく

王政復古（慶応三年・一八六七）

で江戸に戻り、小石川に私塾日新堂を開いた。塾生の中には、会津や鹿兒島出身の者も多く、百人を超したという。

水戸・徳川斎昭の

知遇を得る

北窓は、水戸烈公徳川斎昭（一八〇〇〜六〇）の知遇を得て、小石川の屋敷に招かれ、たびたび酒席を共にして、かなりの酒豪であったという。將軍徳川慶喜（一八三七〜一九一三）に謁見したときも、酩酊した状態で、相対したと

伝えられている。

明治十年二月に、西郷隆盛（一八二七〜七七）が起した西南の役では、鹿兒島出身の日新堂の塾生は故国存亡のときとして郷里に帰り、また会津出身の者は官軍に加わり、寢食を共にした塾生たちも敵味方に分かれて戦った。このような動乱の最中、七月十四日、北窓は五十七歳の生涯を閉じた。

知人・子弟によつて

金龍寺に功德碑が

彼は生前火葬を嫌っていたので、遺骸は、そのまま浅草、智光院に葬むられた。明治十二年二月、子弟、知人によつて功德碑が浅草高原町（現寿二丁目）金龍寺に建てられた。碑の篆額は山岡鉄舟が書き、三島中州が選文して、高橋泥舟が書いた。また裏面には、中村正直が人物評を書いたが、この碑は、大正十二年の関東大震災に遭い、現存していないが碑文の写しが残ったことは不幸中の幸いであった。

（永山祐三）

須賀川の人物史

集古十種を編纂した画像

白雲

雲

(一七六四～一八二五)

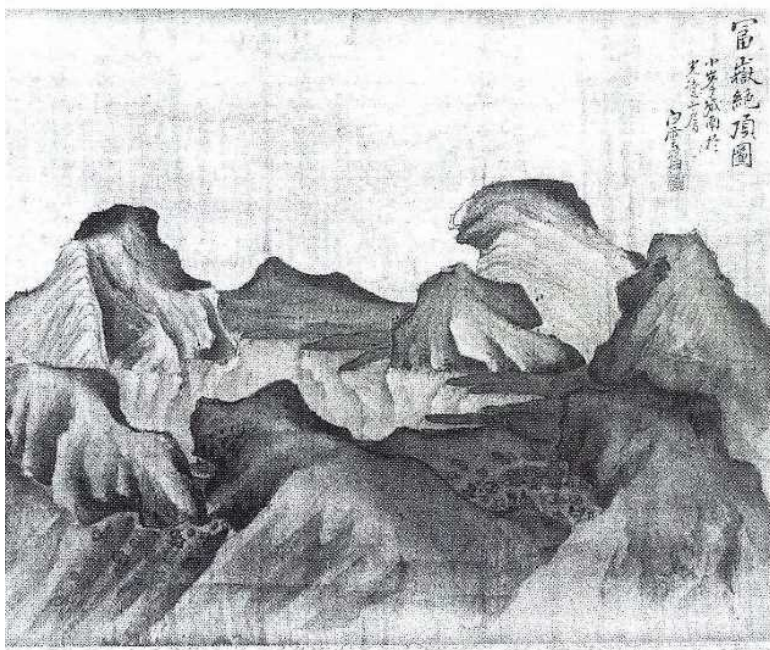
32

白雲は、白河藩主松平定信（楽翁、一七七五～一八二九）が、かねてから計画していた、我が国最初の美術工芸図鑑「集古十種」（鐘銘・碑銘・兵器・楽器・書・画・印章・扁額・銅器・文房）の編纂員として、全国の神社・大名家・民間所蔵者を訪れ、模写や拓本に取って、八十五冊の大集成を成し遂げたスタッフの一人であった。ちなみに編纂に携わったのは、谷文晁をチーフとした、白雲、大野文泉、喜多武清、安田田駒、森川竹窓ほか白河藩御用絵師たちで、約十年の歳月を要した。

15歳で仏門に入る

白雲の出生については、現在までの調査では不明であるが、十五歳の安永八年（一七七九）、道場町（現池上町）、浄

土宗十念寺、十八世良進上人の弟子となり、法号を良善教順と称して仏門に入った。白雲は彼の画号であるが、ほかに、松堂、竹堂、墨痴、蝸牛庵などの号がある。また、集古十種の資料収集が終了した享和年間、松平定信は、その労をねぎらい、「閑松堂」の堂号を贈った。この定信自筆の堂号は、今も十念寺に伝えられている。



「富岳絶頂図」(享和年間の作)

後見人は

大庄屋市原綱稠

白雲は、その後、二十五歳のとき、十念寺十九世住職となり、三十五歳までの二十一年間、十念寺で、絵の制作や集古十種の資料収集にあたっていた。しかし、彼が画家として、定信に認められ、集古十種編纂員になったことについての記録は見あたらないが、その陰に、道場町大庄屋市原綱稠（一七五四～一八一六）がいたからではないか？ 綱稠は、定信からの信頼も厚く、郷土本務、慰斗目馬上羽織の着用、持槍を許され、藩士の列に加えられていた。また御用商人として、藩にとって重要な人物であった。十念寺と市原家は菩提寺と壇家の関係にあった。これらのことから、定信に起用されたものと思われる。

洋画風の遠近法と

高遠法を取り入れる

十念寺時代の白雲は、最初漢画風の画を描いていたが、



白雲肖像画（安田田駒筆）



集古十種（碑名）の愛宕山板碑拓本

寛政四年、谷文晁が白河藩御用
絵師として招聘されてからは、
白雲の画も文晁が取り入れた
洋風画の遠近法と高遠法によ
って描かれた。この技法は、
のちに集古十種の資料収集の
傍ら、各地の風景などを写生
したときに生かされている。

鏡石町鏡田、西光寺（総代鏡
沼村大庄屋、常松敷紹（市原
綱稠の弟）の依頼で制作した
杉戸二十面に「淡煙閣功臣画
像（十二面）」「牡丹に孔雀の
図（四面）」「岩に牡丹の図（四
面）」の作品がある。現在、こ
の杉戸絵は、県指定重要文化
財になっている。

また、「岩瀬郡須賀川町耕地
之図」は高遠法による鳥瞰図
で描かれ、当時の町絵図を代
表するものである。

白河藩御内寺で

編纂に専念

集古十種の編纂も大詰めに
近づいた寛政十一年、定信は
白雲を白河藩御内寺常宣寺二
十二世として迎え、編纂に専
念させた。十一年と十二年の
二度にわたり、白雲を関東以

西、四国地方へ収集の旅に出
した。このとき各地の風景な
どを精力的に写生した。その
主なものに「東海遊覧」「西々
遊行誌」がある。このほかの
写生帖には、「富岳絶頂の図」な
どもあるところから、富士登
山もしたと思われる。この写
生は、のちに本絵として描か
れて今に伝えられている。

寛政十二年（一八〇〇）、集
古十種が刊行の運びとなった。
定信は、これを翌享和元年四
月、將軍家斉に献上した。

その後、白雲は文化三年か

ら九年まで、栃木県黒羽町常
念寺に滞在。同年十一月、四
十八歳のとき、秋田県六郷町
本覚寺に住職として移り、制
作の傍ら、各地を写生して歩
いていたことが残されている。
写生帖から知ることができる。
一生の大半を資料収集と写生
にかけた白雲は、文政八年（一
八二五）、本覚寺で、その生涯
を終えた。六十一歳であった。

現在、白雲の作品は、江戸
画壇の「洋風画」として重要
な位置を占めている。

（永山祐三）



50歳ごろの道山草太郎

中町、茂兵衛の 長男として生まれる

秋風や一盞の酒にひびきあ
り 草太郎

この句は、俳人道山草太郎
の作で、桔槔吟社が昭和五十
年、俳誌「桔槔」の六百号を
記念して、神炊館神社参道に
建てた句碑である。
彼は、明治三十年（一八九

七）二月十七日、東六丁目三
十三番地（現中町）商業道山
茂兵衛の長男として生まれた。
幼名を守三と称したが、十一
歳のとき、父と死別、家督を
相続して名を茂兵衛と改名し
た。

その後、県立安積中学校に
入学。大正三年（十七歳）、早
稲田大学に進学したが、大正
七年、中退して帰郷、家業を
継いだ。この時期、彼は多く

の師と友人を得たのであった。

竹久夢二と 親交が

特に、終生の語り草にして
いた人物に竹久夢二（一八八
四―一九三四）がいた。夢二
はアール・ヌーヴ的な独自
の夢二式美人画を描き、大正
ロマン画家として一世を風靡

須賀川の人物史

33

桔槔吟社創設の一人

道山草太郎

（一八九七―一九七二）

した。夢二は旅行が好きで各
地を訪れ、旅先では遊興に明
け暮れて金が無くなると、旅
館で絵を描き、知人に金策を
頼んだという。夢二は、福島
県内のうち、三春、船引、福
島、若松、喜多方、東山など
に数回来ていた。このとき旅
行の拠点である郡山には、宿
泊することも多く、ここでの
金策は草太郎に頼んだことも
あって、須賀川市内には十数



夢二作の「黒船屋」（大正9年）

点の夢二の作品が好事家の間
にもたらされた。しかし、昭
和三十年ころから夢二ブーム
になり、多くの作品は東京の画
商の手によって流出したが、
残された作品をみると、草太
郎と夢二の交友関係を知るこ
とができる。

また、吉田絃二郎（一八七
六―一九五六、小説家、随筆
家、早稲田大学講師）からは、
宗教的感情からの人生や自然
に対する愛情についての教え
を受けた。これらは、草太郎
俳句の中に溶け込んでいった
ものと思われる。

大正10年 乙夜会に入会

大正十年、須賀川銀行に勤
めていた草太郎は、乙夜会（広

原石鼎を 生涯の師に

十一年五月、椿郎、草太郎、
破籠子が投句していた「鹿火
屋」の主宰者原石鼎を牡丹園
に招き、句会を開いた。この
とき、桔槔吟社結成の運びと
なった。創立同人は前記の三
人と岡部句童、現在九十九歳

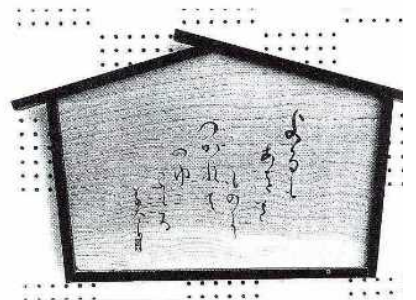
の竹内翠玉（憲治）ほか四人の九人であった。

以後、草太郎は石鼎を生涯の師として敬慕し、村上鬼城や渡辺水巴を知り、研鑽を積んだ。また、芭蕉についての研究も深く、昭和十一年、俳誌

鹿火屋に五回にわたり「芭蕉雑記」の論文を寄せている。この論文は彼の当時の心境を述べているようにも思える。

戦時中は桔槔を がり版刷りで発行

この年以降、松島瑞巖寺僧



道山草太郎の俳句絵馬

堂で、約十年間参禅修業を続

けた。この間、大東亜戦争による統制経済で、桔槔の印刷、製本ができなくなったとき、彼はがり版刷りで発行し、二十三年の復刊まで休むことなく続けた。これが七百七十五号続けてきた桔槔の歴史の一角である。

現在、会員は約六百人、会長は高久田橙子が受け継いで

いる。

須賀川文化協会 創設に尽力

戦後、草太郎がまず手掛けたのは「須賀川文化協会」の創設であった。これが現在の須賀川文化団体連絡協議会と発展して、初代会長に推挙された。また、牡丹園保勝会の設立に尽力し、記念碑の撰文をしている。

このほか、須賀川市社会福祉協議会長、須賀川市町内会長、須賀川観光協会会長などを務め、昭和四十七年（一九七二）二月十三日、午前六時二十分、七十五年の生涯を閉じた。

遺体は、遺言によって献体し医学の上に貢献した。

死の前日、草太郎の病床を見舞った桔槔の俳人たちに書き取らせた「七十五じゃものもうよかろうと寒の水」が辞世の句となった。

これは、飄飄とした風貌の中から計りしれない博識をにじみ出していた、彼の人柄をしのぶことができる。



綱稠像

須賀川の人物史

(34)

江戸末期須賀川の隆盛を図った商人

市原貞右衛門綱稠

(一七四一—一八六六)

天明の大飢饉で貧民を救済

天明二年(一七八二)から五年間続いた天明の大飢饉で、須賀川地方も大きな被害にあったとき須賀川町会所では、飢饉対策としての「米」を貧民に対してどのように吐き出すか、また町益金の有効な運用について、慈善の心情と

商人の本領を発揮したのが、道場町(宮先町)大庄屋市原貞右衛門綱稠などの町会所役人であった。

この時、町会所では、領主の白河藩主松平定信が打ち出した救済策を即実行に移し、田地開拓、道路改修などの土木事業や年貢の二〇％削減を行ったため、須賀川地方では百姓一撥や打ち壊しなどが起こることなかった。

寿稠の長男 幼名を勝之丞

綱稠は、宝暦四年(一七五四)、道場町で酒造業などを営む傍ら、三役(検断・庄屋・問屋)を勤め、町会所役人として、須賀川の司法、行政、経済面に携わっていた市原貞

ちなみに、この飢饉で老中田沼意次は、みるべき具体策を出せず失脚し、白河藩主松平定信が老中の座についた。

右衛門寿稠の長男に生まれた。幼名を勝之丞といった。

寛政2年、定信から御内用達に任命

安永六年、父と死別した彼は、七年(一七七八)二月に、家督と三役を相続して、独礼仮名披露を許され、幼名を改め、貞右衛門綱稠と称した。三十三歳のとき、大庄屋席につき、

寛政二年(一七九〇)、定信から御内用達に任命されると同時に、荒廃していた白坂宿(現白河市内)の取直方(再建)を命ぜられ、高十石を賜った。この事業の功績によって五石の加増を受け、郷士格となった。

42歳で 白河藩士の列に

その後、郷士本務と持鎗を許され、八年、四十二歳のとき、慰斗目馬上羽織の着用を許されて白河藩士の列に加えられた。当時、これは町人にとっては最高の榮譽であったであろう。彼は、白河藩のほか次の各藩から知行などを賜ったという。

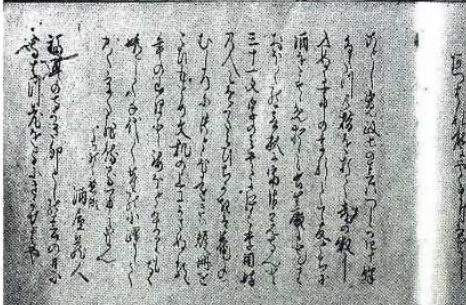
●守山藩松平家、知行百石、
●二本松藩丹羽家、知行百五十石
●高田藩神原家、現米百俵
●三春藩秋田家、知行百石。

これらは、綱稠が、市原家が代々営んできた米穀と塩の取引、それに酒造業を基礎として経済的に発展させて、白河藩、守山藩などの御内用達に任せられ、各藩の財政再建に経済的協力をしたからであった。

白河藩、守山藩では市原家に対する財政的な拠り所として赤子養育金を信託、その利子で事業を行っていた。

妹の多代女に俳諧を勧める

綱稠は、経済的、行政的な



初老年祝い狂歌集「福寿草」酒屋蔵人刊

手腕のほかに文化面にも活躍している。二十二歳年下の妹、市原多代女が心身症に陥ったときに、俳諧の道に入ることと勧め、江戸末期の女流俳人として大成させた。(広報すかがわ昭和六十三年五月号・「須賀川の人物史」参照)。

画僧白雲も 綱稠の援助が

また、江戸洋風画壇に足跡を残した画僧白雲も彼の後援によるところが大きかった(広報すかがわ平成二年八月号・

「須賀川の人物史」参照)。白雲の作品で知られている「須賀川町耕地之図」は、町会所で領主が領内巡視に来たときの説明用に制作させたものと思われる。この裏付けとなる資料が、須賀川市史近世編の資料調査のとき、市原家蔵

町会所関係文書の中から、耕地の図の下絵が発見されたことによつてうかがうことができる。ほかの画家や文人たちも残されている資料や作品などから、彼との交流を知ることができる。

綱稠も酒屋蔵人と 号し狂歌を詠む

綱稠も、号を峯齋亭蔵人、酒屋蔵人として、狂歌を詠んだ。四十二歳の初老の年祝いとき、江戸の狂歌師浅草庵市人や、桑葉庵千則、曼鬼武などからの多くの祝歌と浮世絵師窪俊満の挿絵で狂歌集を出版した。また、江戸や地方の狂歌集と石井雨考編の「青蔭集」などに歌が入集されている。

天明から文化年間の約三十五年間、須賀川の各方面に献身的に貢献した綱稠は、文化十三年(一八一六)二月二十一日子時刻(午前〇時ころ)伽し給ふ人々へ

我は今日此世をさけの魚ならて ひとつの命をひろひけるかな

を辞世の歌として、六十二歳の生涯を終えた。(永山祐三)



田善作「洋人曳馬図」(県重文)

小倉村講中が 満福寺に奉納

今から百八十八年前の享和二年(一八〇二)、東堂山満福

詣人たちは感嘆の声を挙げたものと思う。

この絵馬は、農耕や林産などで馬と苦楽を共にしていた小倉村(現須賀川市大字小倉)の人々が、前記の東堂山の講

須賀川の人物史

(35)

田善の絵馬を奉納した世話人

山田仙吉(一八〇九)

寺観音堂(田村郡小野町大字小戸神)の長押に、地方の人が見たこともない油彩画の「洋人曳馬図」の大絵馬が掲げられた。この時、ほかの絵馬は圧倒され、これを見た参

中を作り、亜欧堂田善(広報すかがわ昭和六十四年一月号「須賀川の人物史」参照)に依頼して奉納したものである。図柄は、ドイツの銅版画家ヨハン・エリアス・リーデン

が「作」銅版諸国馬図」から

「プロシア馬の図」の馬と御者の姿態をとり「トルコ馬の図」の鞍と弓矢などを引用して、そこに田善なりの構成と彩色によって制作された。画面に「奉納、享和二年七月吉日、岩瀬郡小倉村講中」とある。この絵馬は、江戸洋風画を代表するもので、昭和十五年、福島県重要文化財に指定された。

現存する田善の 絵馬は全国で2点

田善作の絵馬は、記録にあるもの二点、現存するもの二点の四点であるが、記録の二



小倉油池近くの石灯ろう

点は焼失したものである。また、東堂山観音堂も、大正五年、火災に遭ったが、田善の絵馬だけ下の本堂に移しておいたので幸い難を逃れたという。

ここで私事になるが、昭和三十七年十一月、東堂山を初めて訪ね、絵馬を拝見した。このときから、小倉村講中とは、どのような人たちであったのか? 以後、各種の調査の機会に裏付けになる資料を探していたところ、昭和六十三年、須賀川水道五十年史の資料収集のとき、小倉油池近くの供養塔群の中の、石灯ろうに「奉納、東堂山、享和二年(一八〇二)天三月吉日講中 埋平三人、中作二十六人、世話仙吉、平次郎内老人、三十人」と銘文のあるのを発見した。

この年号は絵馬と一致するものであり、絵馬を奉納した記念と部落内でいつでも参拝

できるようにと建てられたと思われる。

仙吉は小倉の

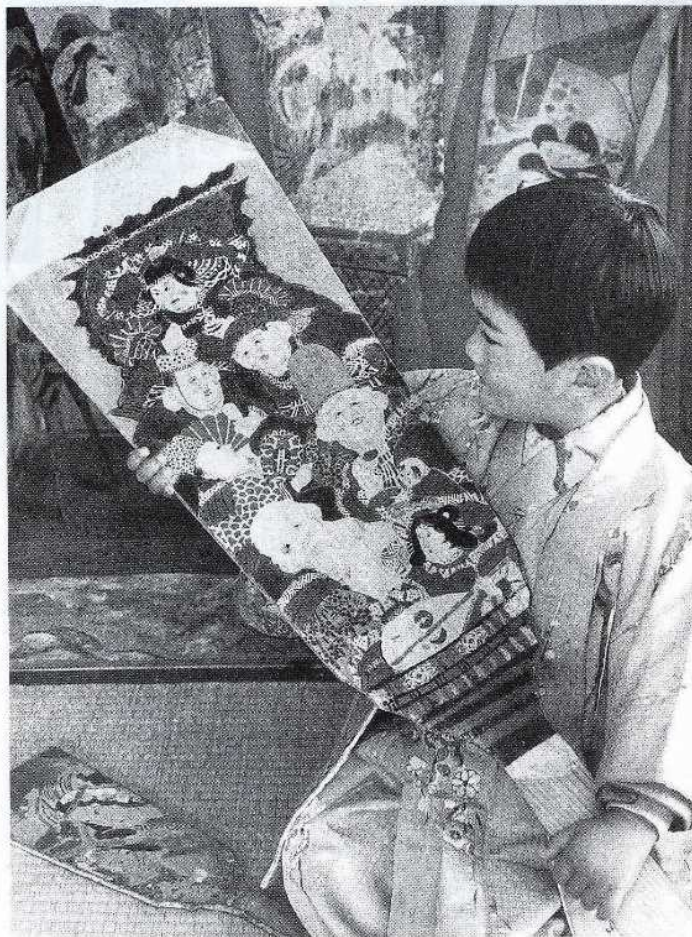
山田一徳さんの先祖

その後の調査によって、世話人仙吉は、小倉字前仲作八十五、山田一徳さんの先祖で文政十二年（一八二九）に没している（生まれ年は不明）。また、石灯ろうの建っている土地も同家の所有地で、小倉字高田一五〇である。山田家は代々、神仏の信仰心が厚く、東堂山や出羽三山参詣の世話をしていたといわれている。

江戸時代、小倉地区は四つの組に分かれていた。二番組仲作は山吹、滑津、後仲作、前仲作の部落で組織されていた。ちなみに二番組は、慶安三年（一六五〇）戸数十四戸、明治四年（一八七一）戸数二十九戸であるところからみると、享和二年に絵馬を奉納したときには、全戸の戸主が講中に参加したと考えられる。

小倉地区には現在、東堂山灯ろう三基、東堂山供養塔一基、馬頭観音供養塔四十三基がある。

（永山祐三）



須賀川羽子板 地方で作られた羽子板の中では、全国一の生産規模を誇った。写真は一番型の羽子板で七福神の図柄(大きさ約1m)

色彩の鮮やかさ 生産量とも日本一

須賀川羽子板は、あまり一般の人たちには知られることもなく、一部趣味人の間で話題にのぼるくらいである。しかし、平凡社刊「世界大百科辞典」羽子板の項に、人形・玩具研究家の山田徳兵衛氏が「福島県須賀川などでは最近まで左義長(正月十五日に、青竹を立てて正月の飾り物を燃やした宮中の儀式)の羽子板を産していた」と、全国でただ一か所産地として特記してい

る。それは各地の羽子板に比べて、大きさ、絵付け、生産量が勝っていたからであろう。須賀川羽子板は、明治十年ころから四十年代の約三十年

間、旧西袋村、大桑原・樽川源朝、袋田・樽川義丸、旧柱田村(現岩瀬村)・佐藤肇治によつて明治中期ころの最盛期には年間、三万枚生産したといわれている。

須賀川の人物史

須賀川羽子板生みの親

樽川源朝

(一八五七〜一九一六)

間、旧西袋村、大桑原・樽川源朝、袋田・樽川義丸、旧柱田村(現岩瀬村)・佐藤肇治によつて明治中期ころの最盛期には年間、三万枚生産したといわれている。

源朝が羽子板作りを始めたのは、明治十二、三年ころといわれている。この時期、彼に長女が生まれ、祖父譲りの器用さで、娘のために作った

長女の誕生祝いに 作ったのが最初

なぜ大桑原の農村部で羽子板作りが行われるようになったのかについての記録などは残されていないが、羽子板生みの親、樽川源朝は、安政四年(一八五七)七月七日、大桑原村字日向百二十八番地、農業樽川伴右工門の長男として生まれた。

このころ、源朝の祖父源重(一八二四〜一九〇〇)は、西川地区で盛んであった地芝居の髪を作り「髪屋」と呼ばれていた。明治九年、朝日稲荷神社に奉納された芝居絵馬に「髪師樽川源重」と記されている。

「歳の市」に出荷 大好評となる

源朝が作った初期の羽子板が数点残されている。これらの絵付けは手描きで大きさは五十センチくらいである。その後、人気が出て量産を余儀無くされ、農閑期には近所の人たちを雇い、絵付けも「合羽版(シルクスクリーン)」を取り入れて、色彩の鮮やかな、七福神などの目出度い図柄を多く描き、大きさも三十センチから一メートルまで数段階のものを作った。それを各地の「歳の市」に出荷し、新年に女の子の初正月祝いに座敷に飾られ、大好評を得たという。

羽子板がきっかけとなったのではないかと思われる。

当時、須賀川は宿場町として栄えており、東京製の質の良い押し絵や描き絵の羽子板も移入されていたことであろう。が、これらは高価で農家や町の人々には手が出なかつたので、安価で見栄えするだれもが喜んで迎えらる物が求められていたのではないか。

明治中期には 年間3万枚の生産

羽子板の需要も順調に伸び、事業拡張の話を大桑原村、袋田村両村の戸長（村長役）をしていた大桑原村新田、二階堂正武（一八三四～一八九四）にしたところ、正武は元修験

者同士で親交のあった袋田村本郷、樽川義丸（一八五九～一九二五）と弟の佐藤峰治（一八六三～一九一七後に柱田村に行き佐藤姓となる）に羽子板作りを勧め、源朝から習って製造に参加した。

製造元が三軒になって明治中期には年間約三万枚の生産量になったと言われている。

生産量が多くなるにつれ、図柄も時代を反映して美人画や福の神のほか、日清、日露戦争のときには明治天皇と皇后、軍人などの絵も描かれた。

押し絵や描き絵に 市場を奪われる

このように順調な生産を続けていた須賀川羽子板も、明治三十五、六年ころ、東京から新しい正月商品、祝い掛け物が須賀川をはじめ、各地に出まわり、羽子板と二緒に店頭で売られた。このころから贈り物も羽子板から掛け物へと変わり、羽子板も下り物の華麗な押し絵や描き絵の物に市場を奪われた。明治時代、女の子の初正月の贈り物として関東、東北地方各地の店頭を賑わした須賀川羽子板も大正初期には、その姿を消したという。

現在、須賀川羽子板は日本玩具史上、高く評価されており、現存している羽子板は地元市立博物館や東京国立博物館、その他各地の博物館、民芸館収集家などに約百枚保存されている。

ルといわれている安積覚兵衛
覚である。

覚の祖父は

二階堂盛義の一族

安積覚について、明治時代

中学校で使われた標註漢文教
科書の中に「第四十 飄簞

澹泊 安積覚（安積覚、字子

先、通称覚兵衛、号澹泊、岩

代須賀川ノ人博學能文最精於

史学水戸義公之編大日本史覚

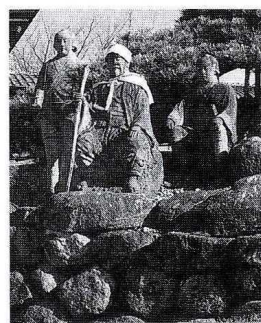
為之總裁（以下略）。本文は飄

簞と題して中国地方の大名、

大内、大友、毛利家などにっ

いて述べたものである。

また、水戸市松本町にある



水戸黄門一行の石像（水戸市、桂岸寺）

安積君墓」、側面には「安積氏
先居奥之須賀川城大父覚兵衛
正信（以下略）」とある。

覚の祖父、覚兵衛正信（一
五八四〜一六五七）は、二階
堂盛義の一族で、飯土用城（天
栄村）の城主飯土用氏であつ
た。が、落城後、妻の出身地
（安積郡日和田村）の安積を氏
姓として流浪し、はじめ信州
松本の小笠原家、次ぎに会津
の蒲生家に仕えたが、城主忠
郷の政策について行けないこ
とを知り、その後江戸に出て、
水戸徳川初代藩主頼房に三百
石をもって抱えられた。その
後百石加増されて四百石とな
り、鎗奉行を勤めた。

父、介之允貞吉（一六二九
〜一六六六）は家督を継ぎ、
四百石をもつて二代藩主光圀
（義公）に仕えた。儒学を好
み漢文著述に抜きんでいて、
義公の信頼も厚かったが三十
七歳の若さで没した。

10歳で

朱舜水の門人に

本号の人物、覚兵衛覚は、
明暦元年（一六五五）、貞吉の
長男として生まれ、彦六と名
付けられた。このころ光圀は、
水戸藩の学問の中心である彰
考館を開設し「大日本史」編
さん事業に着手した。ここか
ら「水戸学」が生まれ、培わ
れた思想が水戸藩の家風とな
り、幕末の勤王思想から近代
日本の進むべき方向を定めた
という。

寛文五年、光圀は明（中国）
の儒者で、長崎に亡命してい
た朱舜水を水戸藩に招いた。
この時、十歳の覚は、光圀に
願ひ出て江戸に上がり、朱舜
水の門人となって勉学に励ん
だ。光圀は彼の精進ぶりを賞
し、書籍代として金三両を与

須賀川の人物史

彰考館総裁・「水戸黄門漫遊記」の格さんのモデル

安積覚兵衛覚（二六五〜二七三七）

天正十七年（一五八九）十

月二十三日、須賀川城は伊達
勢によって落ちた。その後、
城主二階堂家の一族や家臣た
ちは、それぞれの運命の道を
歩んだ。

その中に、現在でも我々の

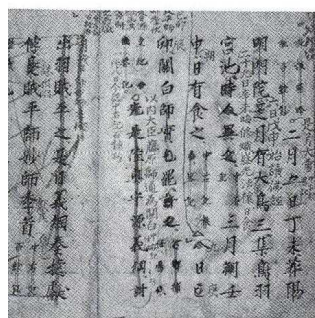
前に現れる人物がいる。この

人物は、TBSテレビが昭和四
十四年八月から放映している
茶の間の人気番組「水戸黄門」
の主人公、徳川光圀（一六二
八〜一七〇〇）の供として活
躍している「格さん」のモデ

水戸藩士だけが葬むられてい

る常磐共有墓地に建てられて
いる彼の墓碑は、孫の覚兵衛
直行が建立し、友人の小池友
賢が約六百三十文字の碑銘を
撰文している。碑の高さ、一

メートルで正面に「故老牛居士



「大日本史」草稿（彰考館蔵）

えたという。

寛は十五歳のとき、二百石を賜り大番組となった。その後、小納戸役、唐物奉行を経

て天和三年（一六八三）、彰考館のスタッフの一員に加えられた。

この年、同僚の佐々宗淳（一

六四〇〜一六九八、通称介三郎、水戸黄門の供「助さん」のモデル）は、史料収集で須賀川代官、相楽家を訪れ「白

河結城文書」の写取を行った。現在、この文書と宗淳の書状は、国の重要文化財に指定されている。

彰考館総裁に

38歳で抜てき

元禄六年（一六九三）三十

八歳の寛は、彰考館総裁を命ぜられ、大日本史編さんに尽力した。特に、光圀が力を入れた朱子学の歴史観にもとづいた道徳の理法を、歴史の中から正しく学びとるという思想が、彼の中でもはぐくまれ、体力と能力は衰えを知らず、七十八歳まで編さんに携って、大きな業績をあげ、「水戸学」の祖といわれている。

享保十八年（一七三三）三

月二十日、三代藩主綱条は、寛に多年の彰考館勤務をねぎらい時服を贈った。彼もこのとき退き「老牛」と号して余生を送ったが、その合い間に十人の合力（助手）を供にして彰考館の手伝いをしたという。この事業は歴代藩主によって受け継がれ、明治三十九年、完結まで二百五十年を要した。

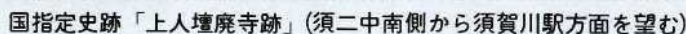
一生を大日本史編さんと水戸学の確立に尽くした寛は、元文二年（一七三七）十二月十日、その生涯を終えた。八十二歳であった。（永山祐三）

38

須賀川の人物史

古代から中世編

38



建^{たけ} 弥^み 依^{より} 米^{めの} 命^{みこと} が

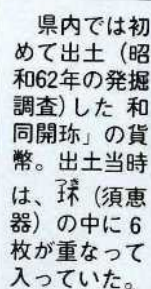
石背国造に任命

それから約三百年後の養老二年（七三二）、陸奥国から白河、石背、会津、安積、信夫の五郡を分けて「石背国」ができた。国の役所である国

高月左大弁が

石背國司に任命

数年前までは、石背の国府の所在地は不明であったが、昭和三十六年から発掘調査が行われた上人坦廢寺跡、その調査で出土した遺物や遺構から、国府は上人坦廢寺跡にあったことが位置づけられた。このことは、昭和六十一年、



国府の国司は、中央（奈良）から派遣され、郡司を統轄した地方官であつた。石背国司に任命されたのは、高月左大弁で、その支配下に前記の五郡が置かれた。当時、国司の任期は六年間で、上人壇に国府が存在した期間はこの間だけであつたと考えられる。石背国は、その後「陸奥国」に統合された。

吉^き弥^み候^こ部^べ上^{かみ}人^{ひと}が

磐瀬郡司に任命

「続日本紀」に、神護景雲三年（七六六）、磐瀬郡司に任命された吉弥候部上人が出てゐる。上人は大領として外正六位上に任ぜられて、磐瀬朝臣の姓を賜つた。この磐瀬氏は

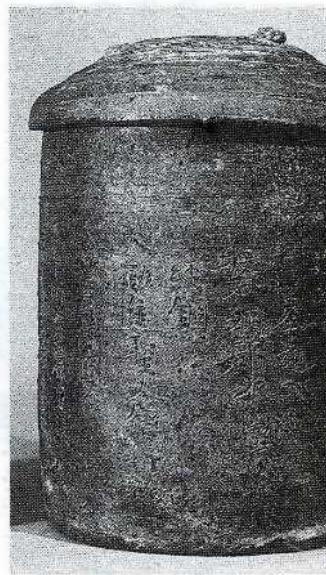
前述の建許呂命の子孫で、人
上以来磐瀬郡を支配した。ほ
かに、上丈部宗成、磐瀬朝臣
富主、磐瀬朝臣長宗、大伴宮城
連などの名が記されている。

糸井国数らが

磐瀬庄司の傘下

平安時代になると東北地方
は、平泉（岩手県）の藤原氏
が巨大な力を持ち、陸奥政府
を開府し、鎮守府將軍に任ぜ
られて陸奥国を掌握した。
磐瀬郡もこの支配下にあつて、
平泉との交流があったことを
知る資料が、上人壇麿寺跡か
ら発掘された。

これは平泉中尊寺に伝えら



3号経塚から出土した「陶製外筒」。現在岩代米山寺経塚出土品として国の重要文化財に指定されている。

れている紺紙金字一切経の軸頭と同時期と考えられる金銅製宝相華文軸頭で、当時を知る一級の資料である。

また、山寺（西川地区）米山寺跡から承安元年（一一七一）、銘の経筒が出土している。

この経筒には、経塚を造営した、僧と施主で糸井国数、藤原貞清、白井友包、藤井末遠、の名が刻まれている。この四人は同時期、福島天王寺、桑

折平沢寺にも経塚を造営している。これらの人物は、平泉藤原氏の支配下にあり、地方名主として農業を営む傍ら、武士団を構成し、磐瀬庄司の傘下にあつた者たちと考えられている。

川中郷（旧磐瀬郡）は

二階堂家の支配下

文治五年（一一八九）、源

頼朝の奥州平定によって、須賀川は鎌倉幕府の奥羽支配の拠点として、その支配に藤原泰衡追討の功績で、岩瀬郡西部は二階堂行村の所領となつた。

行村は岩瀬郡の中央である稲村に築城した。行村は幕府重臣として重用され、常には居城せず、代々、代官を派遣していたと考えられる。この行村を祖とする二階堂家は「稲村二階堂」と称されている。

川中郷（旧磐瀬郡）は、得宗被官の二階堂行朝（行珍）に与えられ、行朝は岩瀬山（現愛宕山）に築城し、守谷館を居館とした。

FCT「ふくしまの素顔」

「亜欧堂田善」特集

本市が生んだ偉大な銅版画家・亜欧堂田善の特集が、福島中央テレビ「ふくしまの素顔」の中で放映されます。どうぞご覧下さい。

＊放映日時 3月3日（日）
正午～0時30分

天正十七年 伊達政宗により滅亡

阿武隈川東部の川東郷は、岩瀬氏に代わって塩田陸奥入道国時の奥州所領支配の拠点が置かれた。岩瀬氏は領地を分断され、下宿郷と二、三の村のみとなった。下宿には顕国魂神社があり、古来から祭主は律令国造の職とされてきた。これら人物によって中世の須賀川地方は統一されてきたが、天正十七年（一五八九）十月二十三日の伊達政宗の攻撃によって落城し、二階堂家四百年にわたった支配は終わった。が、古代から中世にかけて須賀川地方に尽くした人物は多くおり、これらの人たちにについても調査しなければならな

いと思われる。（永山祐三）



石川昭光らが
戦後処理とまちづくり

天正十七年（一五八九）十月
二十六日の合戦で、須賀川を

手中に収めた伊達政宗は四十
日間滞在して、須賀川城を石
川昭光（石川城主）に与え、戦
後処理とまちづくりを命じた。

昭光は、家老の矢吹薩摩を
城代とし、与力に稲村二階堂
きた基本設計は、須賀川城の

須賀川の人物史

近代から現代編

39

伊達家支配から
蒲生氏郷の領地

これによって須賀川は、約
十か月の伊達家支配から、新



十念寺境内にある芭蕉の句碑と円内は市芭蕉記念館の芭蕉翁像（谷文中作）

破棄と宿駅の整備事業で、現
在の市街地の基となった。

会津で天下統一の
奥羽仕置きが行われる

同十八年（一五九〇）七月
五日、関東の雄北条氏直を降
伏させた豊臣秀吉は、十七日
に小田原を進發し会津へと向
かった。

その途中で江戸城を徳川家
康に引き渡し、宇都宮では、
北関東諸大名の処遇と臣従を
決定して、八月九日、会津若松
に到着した。

ここで秀吉の夢であった天
下統一の最後の舞台で、奥羽
仕置きが行われた。

たに会津若松城主となった蒲
生氏郷の領地となった。氏郷
は須賀川を、妹婿の田丸中努
小輔具直に与へて治めさせた。
具直は、前田川用水、小倉
用水などの治水事業に力を入
れ、その事業やまちづくりの
担い手には、旧二階堂家の家
臣で須賀川に土着したものを
起用した。

上杉景勝が
まちづくりに専念

慶長三年（一五九八）一月、
会津若松城主は、蒲生氏郷か
ら上杉景勝になり、須賀川も
その支配下に置かれた。

景勝は、田丸具直からの事
業を引き継ぎ、以後表町に四
町、裏町に十四町のまちづくり
を精力的に行い、その整備は
大きく進んだ。

景勝は、このとき諏訪明神
（神炊館神社）に石の鳥居を奉
納した。（現在あるのは後に再
建）

慶長六年（一六〇一）、関ヶ
原の戦いで、西軍に荷担した
景勝は、会津から米沢に移封
されて須賀川も上杉家の支配
から離れた。

須賀川俳壇の基を築いた芭蕉

このころ江戸幕府は、街道と宿駅の整備に力を入れた。須賀川を通っていた当時の国

道は、古代からの「東山道」で街の東側にあったが、新道の開削で「奥州道（街道）」となり、新しい街の表町、南・北に接続されて、宿場町須賀川の機能が發揮できるようになった。

道路と宿駅の整備によって物資の流通も盛んになり、それに伴って旅人も多くなった。江戸時代も中期になると戦

国時代の戦後処理も全国的に治まり、人々も産業や文化娯楽にエネルギーを燃やし、華の元禄時代をつくりあげた。このころから領主や文人墨客・旅芸人たちは、江戸や上方など各地の文化や情報をもつて須賀川を訪れ、町の人々に大きな影響を与えた。その代表的な人物は、相楽等躬が中心となっていた談林

派須賀川俳壇に、蕉風の新しい風を吹き込み、連綿と三百年の歴史をもつ須賀川俳壇の基を築いてくれた松尾芭蕉（二六四四～一六九四）ではないだろうか。

亜欧堂田善は銅板画の先駆者

また、江戸幕府で老中を務

め、寛政の改革を行った白河藩主松平定信（一七五八～一八二九）は、亜欧堂田善を見出し、銅版画・洋風画の先駆者といわれるまで育てあげた。田善の弟子、安田田騏、遠藤田一なども藩の御用絵師として抱えた。

この時期は、須賀川の江戸文化が華を開いた爛熟期で、茶人の一機庵宗仲、彫刻家の佛師左門、漢学者の吉田柳陰、江戸に出て検校の位にまでなった岩瀬検校がいる。岩瀬検校のことは定信の退閑雑記にも記してある。

須賀川の人物史終了

これまで、須賀川の人物史として三十九回にわたり掲載してきたが、この中には須賀川で終生過ごした人、須賀川に生まれて外に出た人、外から来て須賀川を終の住み家とした人たちがいる。

須賀川には、このほか各分野に尽くした人々が多くいるが、これらの人物については今後の課題としたい。

（永山祐三）